

# チューリーングンにおける集落と ガウ・教区・封建領域について

水 津 一 朗

【要約】チューリーングンについてみると、*afra-; leh-; mar-; rich-; (; stede)* 地名、および *lebon-; ingon* 地名など、成立の古い地名は、それぞれ同類型のものごとに、群落をなして分布している。しかもその分布圏は、「河谷の生活空間」として地理学的單元をなした古代ガウの境域とほぼかさなる場合が多い。ところが、フランク族など西方との関係が深い *heim-; hausen-; dorf* 地名や、六一九世紀以後の成立が明らかな低湿地や森林の開拓地名はガウのまとまりをくすすような形で分布していることから、五三一年古代王国の崩壊のころから、ガウ共同体の分解が始まると推定される。八世紀ころから徐々に形をととのえはじめた教区は、分解期のガウや地方豪族・グラーフなどの勢力圏を足がかりに、キリスト教化の網をはった。さらに、一六世紀初頭の封建諸領域は、エルフルトをはじめとする中世都市を地域中心として、開拓や河川の整備など、古代にはみられなかった地域の充実を背景に新しい結節地域 (*nodal region*) を展開しているが、これまた一一一五世紀の教区組織とかならずしも無関係ではない。

古代・中世の地域構造が、このように変化する中で、地域の最小單元としての集落ごとのオートノミーがしだいに確立していった。それは、農耕地の拡大・三圃農法の普及・集村化現象などと、かたく結びついている。

## 一

ゲルマニアの基本的な地域社会は、ローマ人がパグス (*pagus*) と名づけ、ドイツ語でガウ (*Gau*) と称する單元、およびフンデルトシャフト (*Hundertschaft*) とよばれるグループであった。このガウが数個あつまって、統一的な政治單元としてのキヴィタス ( *civitas*) を構成したのである。

いまでも南ドイツやスイスなどでは、ガウは「河水の貫流して森林の少ないところ」の意味をもち、行政上のクライス (*Kreis*) やカントン (*Kanton*) の名前にうけつがれていることがある。史料にあらわれたガウ名にも、河川・山・森・ローマ都市・方位などに因んだものが少なくないので、その原初形態がきわめて地縁的性格の強いものであったと考えられる<sup>①</sup>。もともとガウは、*Ge + An (Aue)* で、*Ge* は

集合をあらわし、An は高ドイツ語の ouwa、ゴート語の aha と同根で、州や島を意味した。それは「河谷の生活空間」であった<sup>②</sup>。

ところが八世紀のシュワーベンについては、ガウの性格を歴史学的に究明した増田四郎の論考がある<sup>③</sup>。この論考によると、ガウの名称は、ほとんどすべて当時の首長的な貴族の人名、または家名を冠しているという。たとえばエリトガウ (Eritgau) は Erit なる名に発しており、そのガウの中心集落がエルティンゲン (Ertingen) である。ガウの大きさは、大小を平均してまず大体二〇〇 km<sup>2</sup>、そのなかが通常一〇数個の原初村落にわかれている。さらに増田はこの地におけるガウが、人的団体であったことを強調し、その結合の本質が、たんなる地縁的な隣保団体ではなく、なによりもジッペ (Sippe)、または親族共同体やゲフオルクスル (Gefolsherr) 中心の団体であったと結論している<sup>④</sup>。

このことは歴史学的には重要な提言であろう。しかし、たとえ後期のガウがいちじるしく人的団体としての側面を強めていたとしても、その人的団体が在地の農業集落群に

基盤をおいているかぎり、その生活空間には、ある種の地域的なまとまりが存続したばあいはないであろうか。あるとすれば、そのまとまりは、「河谷の生活空間」としての旧来のガウのひろがり、いかなる関係にあったのであろうか。さらにそれらの境域は、中世的世界に生じた封建諸領域の形成にたいして、なんらかの足がかりを提供したことはなかったのであろうか。

歴史的領域に関する歴史地理学的研究をすすめる余地が、すくなくともこのあたりに残されていると思われる<sup>④</sup>。

① S. Rietschel; Gau. J. Hoops Reallexikon. Vol. 4.

② H. Kaufmann; Westdeutsche Ortsnamen mit Unterscheidende Zusätzen. J. Heidelberg 1958. かれは、ガウを Fluslandschaft とよんで、開拓地の Waldlandschaft と対比している。

③ 増田四郎『西洋封建社会成立期の研究』一六一—一七三頁。

④ U. Krämer; Das Allgäu, Werden u. Wesen eines Landschaftsbegriffs. Forschungen zur deutschen Landeskunde, 84, 1954.

## 二

本稿では、チューリンゲン (Thüringen) およびその付近のガウをめぐる、こうした諸問題を明らかにしてみたい。

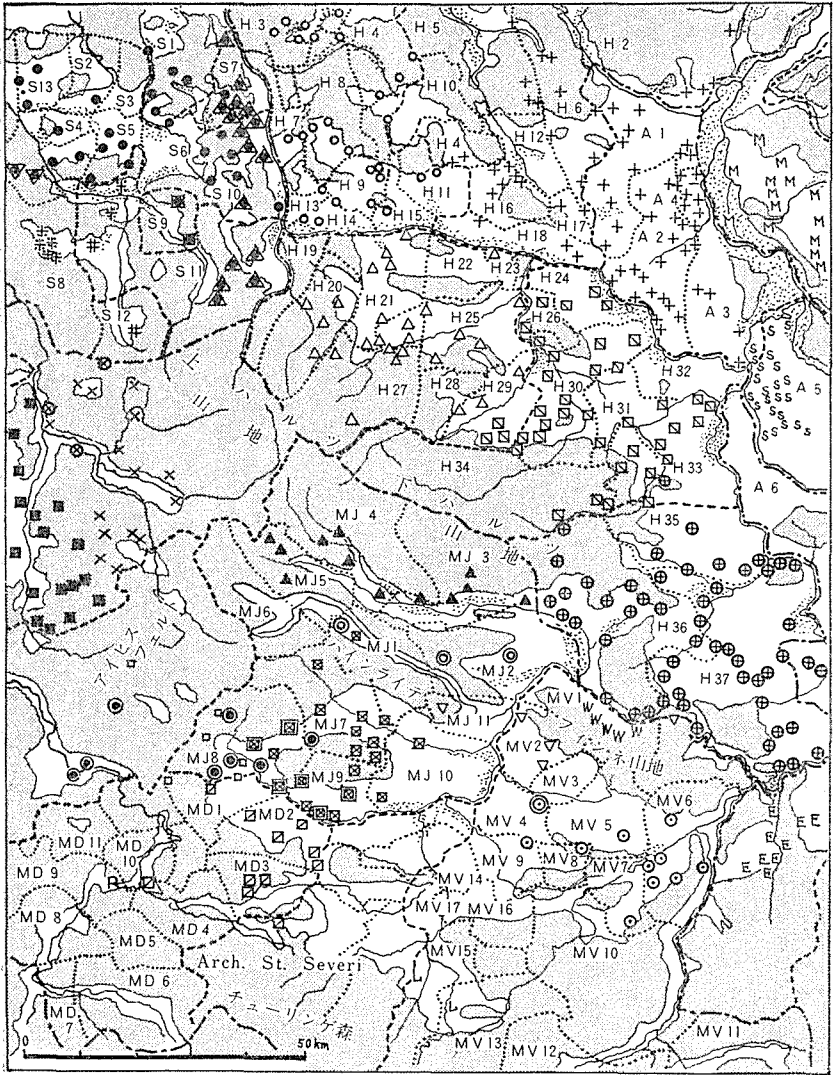
この地方の集落研究は、二〇世紀初頭、シュリューター（O. Schüter）によって先鞭をつけられた。<sup>①</sup>その論文「北東チューリンゲンにおける集落」<sup>②</sup>は、もともとハッレ大学のキルヒホフ（Kirchhof）のもとで研鑽をつづけたシュリューターが、ベルリン大学のリヒトホーフエン（Richtofen）に提出した学位請求論文であった。文化景観の形態学（*Topographie der Kulturlandschaft*）としてのシュリューター地理学は、すでにこの論文にはっきりした輪廓をえがきだしている。その後もかれは、景観学の立場から中部ヨーロッパにおける人間占居の歴史地理学的研究をつづけ、ついにその成果は、「早期歴史時代における中部ヨーロッパの集落空間」<sup>③</sup>となって集大成された。一方、チューリンゲンそのものについては、アウグスト（O. August）との共編で数多くの歴史・地理学者の諸研究を収録した「ザール・中部エルベ地方の歴史地図帳」<sup>④</sup>となって実を結んだ。

私は、チューリンゲンに関するこれらの研究成果をてがかりとしながら、シュリューターの景観学とは別の視角から、早期歴史時代のガウや、集落・中世教区・封建領域などの相互関係について論をすすめたい。

一〇一一世紀におけるガウの各境域については、前記の「歴史地図帳」にヘスラー（W. Hessler）によって補修された地図と解説が収録されている。復原の細部については本稿で批判することはできないが、次頁の地図に示したように、ガウの境域が、シュリューターによって復原された早期歴史時代の原生林や沼沢地にとりかこまれ、その上自然地理学的にも、同一河系を中心とする単元をなしているばあいの多いことが注目をひく。一〇一一世紀のチューリンゲンでは、ガウはなお、「河谷の生活空間」として、社会的機能を果たしたといえるのであろうか。

(I) まず、ガウとそこを占居した社会集団との関係を究明しよう。

集落の地名学的編年は、シュリューターやグラートマン（R. Gradmann）以後、多くの歴史・地理学者や言語学者によって、古文獻や居住地の地理学的条件などを考慮して研究がすすんだが、個々の集落成立時期については、地名だけから判断するのは、ときに危険をとまなう。集落名は変化するし、新しい成立になる集落にも、古い命名法がうけつがれることがあるからである。さらにスラヴ族との接触



● 1	# 6	+ 11	⊙ 16	⊠ 21	w 26	— 31
▽ 2	■ 7	△ 12	▽ 17	⊡ 22	E 27	- - - 32
⊞ 3	X 8	□ 13	⊙ 18	□ 23	S 28	⋯ 33
▲ 4	⊙ 9	⊕ 14	⊙ 19	⊞ 24	M 29	○ 34
# 5	○ 10	▲ 15	⊙ 20	R 25	L 30	⊙ 35

10—11世紀のガウと12世紀—15世紀の教区

[10—11世紀のガウ所属集落] 1 Gau Ostfalen 2 Ostfalen の支ガウ (Scolelinggau)  
3 同 (Salzau) 4 同 (Densigau, Leragau) 5 Flenithi 6 Ambergau 7 Leinegau  
8 Liesgau 9 Liesgau の支ガウ (Rittigau) 10 Derlinggau 11 Nordthüringgau  
12 Harzgau 13 Schwabengau 14 Hosgau (Friesenfeld) 15 Helmegau 16 Nabelgau  
17 Engilin 18 Ostgau 19 Ostgau 支ガウ (Wisichigau) 20 Germarmark 21 Altgau  
22 Vatergau 23 Eichsfeld 24 Westgau 25 Ringgau 26 Westgau 27 Weta  
28 Serimunt 29 Moraciani 30 Langwizza

[12—15世紀の教区] 31 Diözese の境界 32 Diözese Mainz では12世紀の Archidiakonate  
の境界, その他の Diözese では15世紀の Archidiakonate の境界のうち旧ガウの境界ととくに関係  
の深いもの 33 Diözese Mainz では12世紀の Sedes の境界, その他の Diözese では15世紀  
の Archidiakonate (Propstei) の境界

[M=Diözese Mainz] J=Archidiakonate Jechaburg (MJ1=Sedes Jechaburg, MJ2=  
Bad Frankenhausen, MJ 3=Unterberga, MJ 4=Oberberga, MJ 5=Grosswechsungen,  
MJ 6=Bleicherode, MJ 7=Marksussra, MJ 8=Görmar, MJ 9=Kirchheilingen, MJ  
10=Greussen, MJ 11=Kannawurf) D=Archidiakonate Dorla (MD 1=Sedes Nieder-  
doria, MD 2=Ufhoven, MD 3=Grossenbehringen, MD 4=Grossenlupnitz, MD 5=  
Eckarshsn., MD 6=Hausen, MD 7=Vacha, MD 8=Heringen, MD 9=Renda, MD 10  
=Creutzburg, MD 11=Röhrda) V=Archidiakonate St. Mariae Virginis (MV 1=Sedes  
Reinsdorf, MV 2=Leubingen, MV 3=Grossmonra, MV 4=Sommerda, MV 5=Gut-  
hmannshausen, MV 6=Utenbach, MV 7=Ossmannstedt, MV 8=Grossobringen, MV  
9=Ollendorf, MV 10=Oberweimar, MV 11=Pössneck, MV 12=Kirchremda, MV 13=  
Alkersleben, MV 14=Jlversgehoven, MV 15=kirchheim, MV 16=Niederzimmern,  
MV 17=Erfurt)

[H=Diözese Halberstadt] H 1=Wittingen, H 2=Balsamgau, H 3=Meine, H 4=  
Ochsendorf, H 5=Eschenrode, H 6=Alvensleben, H 7=Atzum, H 8=Lucklum, H 9  
=Schöppenstedt, H10=Räbke, H 11=Schöningen, H 12=Selschen, H 13=Kissenbrück,  
H 14=Kalme, H 15=Watenstedt, H 16=Gehringsdorf, H 17=Seehausen, H 18=Osc-  
hersleben, H 19=Westerode, H 20=Osterwieck, H 21=Dardesheim, H 22=Eilenstedt,  
H 23=Hordorf, H 24=Hadmersleben, H 25=Halberstadt, H 26=Eilwardesdorf, H 27  
=Utzleben, H 28=Westerhausen, H 29=Quedlinburg, H 30=Gatersleben, H 31=  
Aschersleben, H 32=Hecklingen, H 33=Wiederstedt, H 34=Harzbann, H 35=Eisle-  
ben, H 36=Kaltenborn, H 37=Osterbahn

[S=Diözese Hildesheim] S 1=Schmedenstedt, S 2=Hohenhameln-Hildesheim, S 3  
=Solschen, S 4=Borsum, S 5=Nettingen, S 6=Legede, S 7=Denstorf, S 8=Alfeld,  
S 9=Ringelheim, S 10=Barum, S 11=Goslar, S 12=Seesen, S 13=Lühnde

[A=Diözese Magdeburg] A 1=Wanzleben, A 2=Weddigen, A 3=Calbe, A 4=Stadt  
Magdeburg, A 5=Köthen, A 6=Halle,

[早期歴史時代の景観] 34 早期歴史時代の森林 35 早期歴史時代の低湿地

のはげしかったチューリンゲンでは、地名のスラヴ化やゲルマン化の問題も無視できない。したがって、集落の起源と地名の起源は、一応きりはなして考えるべきである。そこで本稿では、上記「歴史地図帳」所収の集落地名分布図と荒地地名表を利用し、まず絶対年代の推定をはなれて、少なくとも一〇世紀以前にすでに多量に存在したと考えられる地名類型だけに限定し、つぎのような解釈をこころみたい。

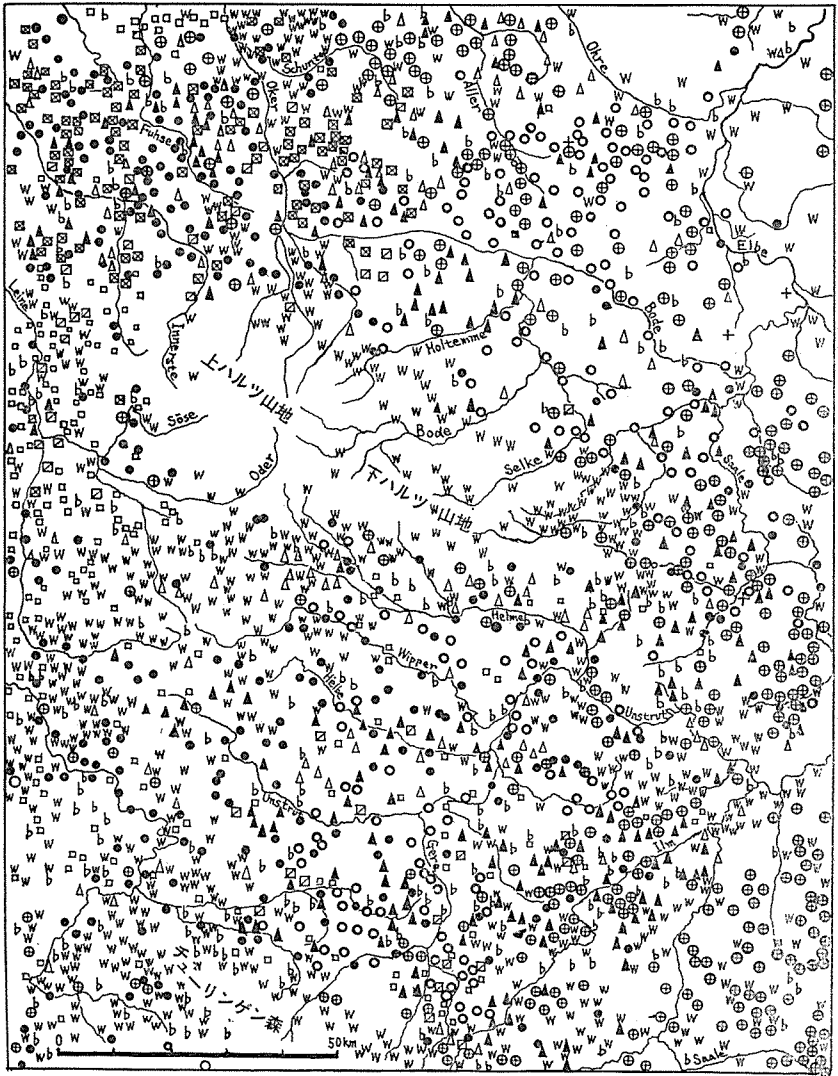
こうした限定のもとに、同類型の集落地名が特定場所に集団的に分布するばあい、その分布圏内に、一〇世紀以前に何らかの共通の社会関係の場があったと予想するのは、一応ゆるされてよからう。<sup>⑥</sup>なお、この分布圏が中世の封建領域を反映するものでないことについては、後述する。

つじつぱ、-alfa·-aha·leh·-lor·mar·-tar·-ithi·-ariなどを語尾にもつ地名群(以下 $\text{a}$ 系地名と略す)と-stedt地名群は、紀元三〇〇年以前の成立になり、しかも前者が後者より古いことが、シュリューターによって、言語学や立地条件を根拠にして推定されたが、ヴィチケ(J. Witschke)の批判するように、<sup>⑧</sup>個々の事例の絶対年代については、いまのと

ころかならずしも断定できない。しかしこれらの地名のなかには、早く開かれた古代交通路上の肥沃な場所を占居するものが少なくないし、八世紀ころからは文献上にも所見するばあいがある。ただ-stedt地名は、東ドイツや西南ドイツでは、-dorfなどと同じくやや成立が新しいとみる説があるが、チューリンゲンは、stedt地名の分布上の一中心であり、かつここでは、成立の古い-lebenや-ingenなどとともに、一六世紀の史料分析から早く典型的な集村形態をとったことが推測できるし、しかもその分布は後述するように、ガウの境域と深い関係をもっている。したがって本節では、便宜上、 $\text{a}$ 系地名とともに、stedt地名をも一括して論をすすめたい。

左図をみていただきたい。stedt地名は、アルラー(Aller)・ライネ(Leine)河系、およびその南のヴェッラ(Werra)河系では、 $\text{a}$ 系地名の分布領域のまわりに添在するにすぎないが、エルベ(Elbe)・ザール(Saale)・ウンシュトゥルト(Unstrut)河系ではしだいに比率をます。

まず西方のライネ川と支流ゼーセ・オーデル川の合流点、およびその東方の細長い河谷の両斜面には、 $\text{a}$ 系地名の



- |     |     |      |      |     |     |     |
|-----|-----|------|------|-----|-----|-----|
| ● 1 | ▲ 2 | ○ 3  | △ 4  | + 5 | □ 6 | ⊠ 7 |
| ⊠ 8 | ⊕ 9 | b 10 | w 11 |     |     |     |

1 -affa, -aha, -lar, -loch, -mor, -tar, -ithi-ari (a系地名) 2 -stedt 3 -leben 4 -ingen  
 5 -by 6 -hausen 7 -heim 8 -um, -en 9 -dorf 10 -au, -berg, -born, -furt, -brück,  
 -bach (-beck, -beek, -ke) 11 -rode, -reuth, -thal, -burg, -fels, -stein, -rieth, -büttel,  
 その他教会関係の開拓地名

チューリンゲンにおける早期歴史時代の地名分布

まとまった分布領域が、リースガウ (Riesgau) の領域にほぼかさなり、その南のライネガウ (Leinagan) でも、上ライネ河谷にこの地名が群落をなしている。したがって、これらの地名が大挙して成立した早期歴史時代には、これらの群落ごとに、ガウを単元としてそれぞれ完結した社会関係圏の存在したことが推定できないだろうか。しかしこの推定を確認するためには、類似した事例をそろえなければならぬ。

インネルステ (Innerste) 川からオカ (Oker) 川にはさまれた地方でも、*e* 系地名群の分布がみられる。だがその分布はやや複雑で、南は山でかぎられ、一〇—一世紀のガウオストファーレン (Gau Ostfalen) の領域とほぼ一致するが、東はオカ川をこえて、デルリングガウ (Derlingan) の西南部までのびている。しかし、オカ川の境界機能が後世にも強くみられることからして、オカ川をはさんで、両ガウの *e* 系集落群は、それぞれ別の社会関係を形成していたと考えてよからう。一方デルリングガウでは、*stedt* 地名のかたまりが、さらに東のノルトチューリングガウ (Norththuringan) にも連続し、地名分布とガウ領域との関係がは

っきりしない。この地方は、ライネ河系とエルベ河系の合するところであり、後でものべるように、はやくから両河系にそってひがった諸文化圏の接触地点であったことを考慮すべきであろう。

しかしボーデ (Bode) 川とハルツ山地で周囲をかこまれたハルツ前地では、明らかに最古の農地と考えられる肥沃なレス層上に、*stedt* 地名がかたまっている。その範囲は、ハルツガウ (Harzgan) におさまる。シェーベンガウ (Schwabenan) やホスガウ (Hosgan) ・オストガウ (Ostgan) などザーレ・イルム (Ilm) 川流域にも *stedt* 地名が卓越し、それぞれ群れをなしてガウの領域にひろがっている。一方これらと対照的なのが、その西方の孤立した支谷盆地にあるヘルメガウ (Helmegan) とナーベルガウ (Nabelgan) の *ba* あいである。ここでは、*e* 系地名が群落をなして、*stedt* 地名を周辺部におしやっているのが注目をひく。

ところがその南では、ウンシュトゥルト川兩岸にまたがるガウ エンギリン (Gau Englin) やその上流部には両地名がふたたび混在してくるが、この現象が、一〇世紀のアイヒスフェルト (Eichsfeld) ・ファーターガウ (Vatergan)



・アルトガウ (Altgau) の混在した特殊な政治領域、ゲルマルマルク (Germaruk) の形成といかに関係するかにについては、いまにわかに決定しがたい。この地方からゲラ (Gera) 川流域にかけて、チューーリンゲン盆地の中心であり、はやくから居住がすんだ。

(II) チューーリンゲン地方では、シュリューターによると、三〇〇年から五三二年にかけて、leben や -ingen・(-by) 地名の集落が成立したと推定されている。しかしここでも、絶対年代の問題をはなれて、分布現象から推論したい。ところでドイツ全体についてみると、leben 地名は、ユトランド (Jutland) からエルベ河系にそって中部ドイツにのみ分布するのに対して、-ingen 地名は、西部ドイツや南部ドイツに多く、西南ドイツにおけるグラートマン・メッツ・フッテンロヒアなどの諸研究からスエビ (Suebi) 族やアレマン (Alamannen) 族との関係が強いとされている。なお後述の諸事情からして、これらの地名をになう両集団が、チューーリンゲンにおいて、早期歴史時代に深く相互に接触しあつたこともほぼ確実である。

-ingen 地名がヴェッラ・ライネ両河系に多いのに対して、

leben 地名は、エルベ・ウンシュトゥルト両河系のすぐれた土壤に多い。ガウ オストファーレンでは、後世この地方の中心集落として栄えるヒルデスハイム (Hildesheim) やザルツギッター (Salzgitter) の近くに、-ingen 地名が集んでいるのが注目をひく。一方、デルリングガウの境域では、すでに -s 系と -stedt 系の混在を指摘したが、leben と -ingen 両地名群も混在している。-ingen 地名は西南部に、leben 地名は東部にやや多く、さらにこれらはノルトチューーリングガウにまでのび、両ガウの境域と社会集団のひろがりとの間に不整合のあつた可能性を示している。しかしガウ名そのものが、両者とも -ingen 地名の一種であることからみて、すくなくとも両ガウ名の成立期には、-ingen 地名をになつた勢力がガウの主導権をにぎつたと断じなければならぬ。ノルトチューーリングガウは、五三一年崩壊した古代チューーリンゲン王国の残存形態であつた。エルベ・ザーレ・ボーデの三川にはさまれたマグデブルク (Magdeburg) 沃野は、leben 系地名の分布中心である。ノルトチューーリングガウは、この地名を中核として構成されている。その南につづくシュワールベンガウにも、大量の

-leben 地名がかたまっており、前述の -stedt とともに、-leben 系の社会集団がボーデ川の本・支流やその東部に樹枝状にひろがって、かれらを主体とした政治・社会体制のあったことがうかがわれる。ザール・ウンシュトゥット川とハルツ前地にかこまれたホスガウにおいても、事情はほぼ同様である。

このように、-leben 地名がエルベ・ザール川流域に多量に分布するのは、具体的にはヴァルン人 (Warnen) やアングエル人 (Angeln) の移住を反映すると考える説がある。<sup>⑨</sup>

一方、シュワーベンガウの名称そのものは、かつてこの地を占居したスエビ族 (トレミーの地図ではエルベ右岸に Semnonones Suebi がすんだ) に因む命名であり、主としてフィッネ山地の南を占めたガウ エンギリンも、スエビ系のアングエル人 (トレミーの地図の Sueh Angeli) に因むものかもしれない。<sup>⑩</sup> しかし、シュワーベンガウやガウ エンギリンにも、-ingen 地名をまじえながら -leben 地名が多く、この地方一帯に、ふるくから -leben 系集団を基盤とした時代のあったことを物語っている。-ingen 地名をつけたチェーリングン王国の崩壊こそは、かつてこの地方を征圧した

-ingen 系勢力の瓦落をはっきりと示すものであろう。

しかし、山越えに西方の -ingen 地名の大集団と通じたと考えられるウンシュトゥット川支流ヘルメ (Helme) 河谷のとざされた山間盆地においては、-ingen 地名がヘルメガウのもとをつくっている。地形図をみると、アインツィンゲン (Einzingen)・オーヘルレブリンゲン (Oberhillingen)・グスライムンゲン (Grossleimungen)・モルンゲン (Mornungen)・ロ・ベヌンゲン (Benungen)・チャールンゲン (Thürungen) などの諸集落が、居住条件のよいところを占居し、その外側の初期中世の森林や湿地に、-rode-riet 地名などの集落と接して、明らかに母村より新しい集落と考えられるクライン・ライムンゲン (Klein-Leimungen)・ニーターレブリンゲン (Niederhillingen) などが立地している。このように、ヘルメガウでは、-ingen 系集落が分村して、前記の -a 系地名の集落を抱きこむように、徐々に河谷の地域的統一をみたしていった歴史をよみとることができる。<sup>⑪</sup>

ところが、ヘルメ川沿いの低湿地を境に、右岸以南では、ウィッセル (Wipper) 河谷までのヴィンドライテ (Windichte) 地方に、-leben 地名が卓越し、前記の -a 系地名と

ともに、ナーベルガウを充填している。一方、ウンシュトゥルト川上流では、左岸の一部で *leben-ingen* 両地名が、*a-stedt* 両地名と、りくみ、諸集団の混濁がはげしかったことを示しているが、さらに南方にむかうと、ヴェッラ川支谷のヴェストガウ (*Westgau*) やゲラ川上流のラングヴィツァガウ (*Langwiza*) に、ふたたび *leben* 地名の大群落が、*o-feld* 地名その他を周辺におしやるような恰好でひろく分布している。エルフルト (*Erfurt*) に近いこの盆地は、チューリーングンの奥座敷であった。

こうした地名群落を成立せしめた社会関係の場こそ、まさにガウ共同体の生活空間であったのではあるまいか。

(Ⅲ) 六五〇年以降、スラウ集落がエルベ・ザールレ川以東にあらわれ、部分的にはその西方でもスラウとゲルマン両族が接触することになった。さらに九世紀以後になると、それまで忌避されていたハルツ・アイヒスフェルト (*Eichsfeld*)・チューリーングン森などの針葉樹林帯や低湿地の開発が大がかりに開始された。

まず九世紀以降の森林や低湿地の開発によって成立したことの明白な、*-rode*・*-reuth*・*-thal*・*-burg*・*-fels*・*-stein*・

*-reih*・*-battel* などの地名分布をみよう。いずれも一〇一一世紀のガウの縁辺部やその外側にかたまっていることが多い。これらの地名は、シュリーター以後の集落地理学的研究で明らかになったように、中世の計画的な開拓集落たる林隙村 (*Waldhufendorf*) や小村・散村の成立にともなうものであったが、これらの地名がガウ境域の外縁部に多く、それぞれ独自のかたまり方をしていることからして、「河谷の生活空間」としての古いガウそのものは、当時の開拓事情そのものよりも、むしろ九世紀以前の古い地域社会の事情をうけつぐところが大きかったと推定される。山間部のなかには、ヘルメガウの支ガウ、ツォルゲガウ (*Zorogau*) をはじめ、開拓地名が卓越し、開拓によってはじめて充実したものもあると考えられる。「河谷の生活空間」たるガウから、「山の生活空間」たるガウの分胞であろう。以上の事柄をもとにして、つぎのように論をすすめてみたい。シュリーターは、チューリーングン王国が崩壊した五三一年以後、八〇〇年ごろまでには、*-hausen* (*-sen*)・*heim*・*-um* (*-en*)・*-dorf*・*-au* (*-berg*・*-born*・*-furt*・*-bruck*)・*-bach* (*-beck*・*-beeck*・*-ke*) などの地名群があらわれると考えてゐる。

heim 地名は、アルラー・ライネ・ヴェッラ川などのヴェーゼル川支谷以西にひろく分布しているのに反して、チューリングゲンには分布が少ない。西ドイツの研究成果によると、この地名の多くは、フランク体制の負担者と関係をもつことが明らかであるが、heim 地名が低ザクセン風に変形した -im (-en) 地名がなかには、それ以前に中部ドイツに入りこんだものもあるとされている。ところがガウオストファーレンでは、-a-ingen 地名をまわりにおしつける恰好で、ヒルデスハイムをとりかこんで -im (-en) 地名がみられ、それはデルリングガウ西部やハルツガウ西北部にまで断続している。<sup>63)</sup> エヴァース (W. Evers) は、ヒルデスハイム近傍レツム (Retzum) の形態分析から、この集落が紀元初期に散村から小さい集村へと凝集したことを説き、-heim 地名が -ihh- 地名などと同様に、フランク以前にさかのぼるばあいのあることを強調した。<sup>64)</sup> しかしレツムの集落が当初から -heim 地名であったかどうかは不明であり、一般論としては、-heim 地名とフランク体制との関係は動かしえない。とにかく、西部の新体制の影響を身につけた -heim 系勢力の出現によって、ガウに新しい動

きがでたばあいのあることは、たしかであろう。オストファーレンでは、少なくとも一〇—一世紀には、ガウ境域の東南部に、開発地名の多い支ガウ、ザルツガウ (Salzau) やレラガウ (Laragan)・デンシガウ (Donsigan) などが成立している。

ライネ川上流のリースガウやライネガウには、-heim 地名が、ノルトハイム (Nordheim) をはじめ、ライネ川と東部支谷との合流点などの要衝付近に多い。なおここでは、-hausen 地名もかたまつてあらわれる。

しかし、なによりも注目をひくのは、七・八世紀以来チューリングゲンが新しい動きをはじめの中心舞台となったエルフルトに近いラングヴィツガウに、-heim 地名の出現がいちじるしいことであろう。

-dorf 地名は、主としてスラヴとゲルマン両族の接触線上にあり、めぐまれた土壌に多いが、高い森林や低湿地にもみられるので、開拓集落としての性格をも否定できない。フランク人による東方植民に由来するというシュリーター説を、ヴェチケも支持している。<sup>65)</sup> エルベ河系のノルトチューリングガウに、この地名がもっとも卓越していること

も、この見解を助ける。この地名の卓越することからこの地方の勢力交替も、次章でのべるように当然予想してよいであろう。-dorf 地名は、デルリングガウ北部でも、アラール川とシュンター (Schunter) 川にはさまれた森林部に集中的にあらわれる。

シュワーベンガウでも、-dorf 地名が分布はするが、やその数が少なく、しかも局所的である。ところがホスガウやオストガウ地方では、-hausen・-dorf のほか、-au (-berg・-born・-furt・-bruck) や -bach (-beck・-beek・-ke) 系地名も諸河川にそって混在してあらわれる。-au や -bach 系地名は、低湿氾濫原の開発によつてできた集落で、オストガウの支ガウ、ヴィジヒガウ (Wischgau) は、あるいはかかる開発の新事態を反映するものかもしれない。なおホスガウ・オストガウ一带に -dorf 地名が多いことからして、従来この地方を掌握していた -stedt 系集団にかわつて、フランク系植民を中心に、ゲルマンとスラヴの混淆がすすんだと考えられる。

ウンシュトゥルト支谷山間部に立地したナーベルガウやゲルマルマルク地方では、各種の新地名が分散的に成立す

るにすぎないが、-heim 地名の多かった前述のラングヴィツガウには、-hausen 地名も多い。

ところで、-ingen・-leben および -heim などの集落が、がいして肥沃な土壌に立地し、農業集落としての特色をいろうくおびたのに対して、-hausen 地名は、その外縁部に立地する傾向があり、はやくシュリューターが指摘したように、交通上のめぐまれた位置をしめ、都市に発達したのもも多い。かつこの地名は、リースガウやライネガウ以外では孤立的にしかあらわれないこと、その分布状態からみてチューリンゲンではヘッセ・フランケン地方から侵入した可能性のあること、またこの地名の最古型が大抵単数型であり、この集落がはじめ単独の屋敷から成立し、のちに集村に発達したらしいこと、語尾の -haus が貴族や豪族の居館を意味するかもしれないこと、以上の諸事実からして、-hausen 地名をフランク貴族層、ないしザクセン・フリーセン系勢力の拠点として推論できる。一般的には、フランク体制の進出 (Frankenstärkung) をあらわすものである。この地名の混在するホスガウには、カルテンポルン (Kaltenborn) 周辺にフリーセンフェルト (Friesenfeld) と

よばれた支ガウがあり、フランク王権によりフリース人の占居したことが歴史学上でも実証できる。<sup>⑧</sup>一〇世紀までには、フリーセンフェルトの方が、重要性をましたという。

(IV) 以上、地名群とその分布現象を手がかりとして、古くからチューリングンとその周辺を占居した諸社会集団の生活空間について推論してきた。その結果、自然地理学的にもまとまりの強かったガウが、少なくともフランク体制が強化されるまでは、人的集団のたんなるひろがりであるという解釈をはるかにこえて、むしろ基本的には、*h*系や *leben-ingen* (あるいは *-stedt*) などの地名をもつ集落群を主とする集団——おそらく原初的なガウ共同体——のひろがりをも、河谷を媒介として規定しつづけたことが歴然とした。がいてして各集団勢力とも、完結的な「河谷の生活空間」としてのガウないし支ガウを、できるだけひろく掌握することによってのみ、はじめてガウ共同体の安定した主権の座を確保できたらしい。

もちろん歴史の経過するなかで、ガウ内外における勢力の交替ははげしかった。一般的にみて、系譜のちがう諸集団が同じガウに共存する機会がませばますますほど、それだけ

ガウ全体の社会的統一性を複雑化するのには、自明の事実であろう。ガウの細分化・分裂化の傾向は、*heim-dorf*・*hausen* などのフランク系地名が卓越するにつれて、とくに顕在化したのではあるまいか。これらの地名は、はやくガウを占居した *leben-ingen* などの地名に比較して、ガウ境域の一部分にのみ偏在する傾向があった。さらに、ノルトチューリングガウなどにおける *leben* と *-dorf*、ホスガウやオストガウなどにおける *stedt* と *ort* 地名群の棲み分け現象、デルリングガウやウンシュトルト川上流における各種地名群の乱立なども、ガウの分裂化を示すものであろう。一〇世紀、エルフルトをはじめ、その付近のアルンシュタット (Arnstadt)・オールドルフ (Ohrdruf) などでは、もはや所属ガウが不明であった。しかしエルフルトのごときは、古くからガウの中心地で、ガウの城塞をもったことが、七四二年のボンファティウス (Bonifatius) の古文獻に語られている。<sup>⑨</sup>

一方、八〇〇年ころから、森林伐採技術の進歩とともに、それまでさけられていた針葉樹林の開拓がすすみ、新しい集落が旧来のガウの外縁部につぎつぎと成立し、新しい

「山の生活空間」が充実したが、これらが支ガウの成熟と無関係ではなかったと考えられることについても、既述した。ミューラー (H. Müller) の花粉分析の成果によっても、六世紀ころから、穀物の比率が急速に上昇し、社会の変化を暗示している<sup>⑤</sup>。またスラヴ族の西漸とともに、エルベ・ザール川流域にはゲルマンの城塞 (Burgward) ができた。こうした時代の背景のなかで、ガウだけが古い形をいつまでも固持することはできなかった。

なお七世紀前半からは、文献上でも Rudolf・Ruodi・Heden der Ältere・Gozbert・Theothalt・Helden der Jungere などフランク貴族層にぞくすると推定される一連の太公が登場し、かれらと土着豪族層との抗争がみられ、チューリンゲンの古い体制がくずれていくことが明瞭である。七八〇年には、シェワーベンガウ東方のホッホゼーガウ (Hochseegan) (ハルスフェルト修道院寄進) における一〇分の一税が、二人のグラーフ Alberich と Marcoard によって徴収されているし、一〇世紀には、Bardo がイルム (Ilm) 川とザール川にはさまれたオストガウのグラーフであったことなどが指摘され、カロリンガー体制は、徐々に

チューリンゲンへ滲透していった。すでに九世紀中葉から、チューリンゲンにおける王権の担い手として、dux ないし marchio も登場してくる。

古代キヴィタスの下位単位として、一つの政治的複合体にまで高まったと考えられるガウや支ガウの旧秩序が、歴史的世界のなかでしだいに蚕食され、変質した傍証として、グラーフ権が旧ガウの境域を切断して賦与されたばあいのあることをあげておきたい<sup>⑥</sup>。

① 拙稿「ドイツにおける歴史地理学の特質——シュリーターの地理学をめぐって——」(『歴史地理学紀要』一) および「シュリーターと文化景観の形態学」(『地理』八〇—二)。

② O. Schlüter; Die Siedelungen im nordöstlichen Thüringen. Berlin 1903. 本書は、織田武雄教授所蔵のものを閲覽できた。厚く感謝の意を表したい。

③ O. Schlüter; DieStädlungsstätte Mitteleuropas in frühgeschichtlicher Zeit. I, 1952, II, 1953, III, 1958.

④ O. Schlüter-O. August (ed.); Atlas des Saale u. Mittelren Elbegebietes. Leipzig 1958.

⑤ 前掲「歴史地図帳」第5葉に収録。シュリーターは、古生物学・地名学・地理学などの知識を綜合して、早期歴史時代・初期中世・一九世紀末期の景観断面を復原した。細部については、修正すべき部分があるが、別図ではシュリーターの復原にしたがった。

⑥ 個々の地名の変化については、ウエストフリアにおける多年の実地研究(ちとどき)「ニーマイアが多く事例をあげている(G. Niemeyer; Die Kulturgeographische Fundierung der Ortsnamenforschung, Erdkund, 315, 1950)」。しかしかれは「特定の地名類型が広い範囲にわたって、特定の文化地理学的構造をもつことがわかれば、地名は、集落史や文化景観史にとって、決定的な証明力をもつことが期待できる」とし、新旧の居住地域がそれぞれ広まると共に、*st*をまわっているはあくに、*st*とくにかまわることが該当するとしている。

私は、同類型の地名が、集団(群落)をなして分布する現象だけをとりあげることによって、個々の地名の変化から生じる推論の誤謬を免けたい。したがって、特定場所と異なった類型の地名が集団的に同類型に変化した場合があっても、一向にかまわなう。オホーメツは同じ地名類型や方言集団の成立する背景に、*Verkehrsgemeinschaft* を *menschliche Organisationsraum* を想定してゐる。なお私は、「一〇世紀以前に何らかの共通の社会関係の場があった」とことを確認するために、あとで、上記の地名現象が、封建諸領域とはほとんど関係をもたないことを証明する。(H. Oberbeck; Die Deutschen Ortsnamen und Mundarten in Kulturlandschaftsgeschichtlicher Beleuchtung, Erdkunde, 11, 1957)。

⑦ *-stedt* 地名は、あつたの *-ingen* *-leben* 地名などより分布範囲がひろく、全チューリングゲンをはじめ、ホルシタイン・ウエストフリアをのぞく全ザクセン地方にも卓越する。シエリョーターは *-ingen* *-leben* 地名がアングル・ヴァルン・スエビ族などと関連するとなれば、これらの種族より後代には強大な移住者の流れが文献上でもないことから、*st* 地名はこれらの種族より前代のもつと推定すべし(この名の *st*、タキトウスの記述にみえるヘルムンドウリー族(Hermundur) と *st* 地名との結びつきを想定している)。

⑧ J. Wütsche; Ältere Ortsnamengruppen (in Atlas des Saale-u. Mittleren Elbegebietes) S. 37.

a. 系地名のなかには、*st* 語源の疑いのあるものがあるが、*st* 地名のなかには、九世紀以後の開拓集落のはあいが多い。しかしこのはあい、西南ドイツでは *st* 地名となることが多い。なお、*a* 系を一括して論じていることも問題があるが、前掲「地図帳」からは、その識別がむづかしいので、とりあえず一括して論を進める。

⑨ *g* ールン(W. Seelmann)の見解があるが、シエリョーターも *Die Siedelungen*, S. 179, のに入っている。しかしフイーゼルの新しい研究によると、*-leben* 地名がチューリングゲンに成立するのは七世紀初頭から一〇世紀にかけてあつて、チューリングゲン王国とは無関係な(L. Fiesel; Gründungszeit deutscher Orte mit dem Grundwort *-leben* u. Siedlungsbeginn in der Magdeburger Börde, Blätter für deutsche Landesgeschichte, 90, 1953)。  
だがこの推定も証拠不十分である。*-ingen* 地名や後述するフランク系の *-heim* 地名が、いずれも *-leben* 地名の卓越地帯にはほとんど入りこんでいない点からみて、*-leben* は少なくとも *-ingen* よりも古い成立になるとおもふべき。

⑩ *g* ンダル族が *-ing* 地名をあたつたこと、インツラントに多く見られる事例がある(Oiscingas・Wuffingas・Kyteringas・Diccingun・Avening・Naezing など)。P. H. Reaney; *The Origin of English Place-Names*, London 1960, を参照。

⑪ チューリングゲン王国崩壊の事情については、早川良弥「叙任権闘争前のテューリングゲンにおける貴族支配制」(『史料』四五の六)にくわしい。チューリングゲン王国の前身が、タキトウスのヘルムンドウリー族の国であったことは、ほぼ確実であろう。「……今ダースキウス河にしたがつて筆をすすめるならば、イタリアに他よりも近く、ます



ローマ人に忠実なるヘルムンドウーリーの国がよこたわる。その忠実のゆえをもって、ゲルマニア族のうちひとりかれらのみが、ダヌス川ウスの河岸のみならず、またローマの勢力圏内に深く立ち入り、ラエティア州の最も壮麗なる植民市 (Augusta Vindelicorum) においてさえ、我々ローマ人も商取引をなすことを許されているのである。……ヘルムンドウーリーの許において、アルピス (エルム) の流れが起る。……」(Germania, c. 41) トンニーは、チューリンゲン森の北方に Teurochaemi をおこす。Torinus の名は、五世紀 Vegetius Renatus の arte venatoria IV, 6 に初見する。K. Kreisner; Historische Geographie von Mitteleuropa. München u. Berlin 1904. S. 167)。

⑫ ついでに集落地理学的分析については「Die Siedlungen im nordöstlichen Thüringen」を参照。

⑬ ヘルムン前地については、オーストリアの詳細な歴史地理学的研究に「heim」地名は、六―七世紀に主として成立したとされる。なお、-ingen 地名は、六世紀以前にさかのぼるが、-ithi 地名などより成立が新しく、まぎらしくは四―五世紀であろうとされる (G. Oberbeck; Die mittelalterliche Kulturlandschaft des Gebietes um Gihorn. Schriften der wirtschaftswissenschaftlichen Gesellschaft zum Studium Niedersachsens. 66, 1957. S. 36-38)。

⑭ W. Evers; Das „Hof-und Dorf“-Problem auf Grund neuer Untersuchungen im mittleren Ostfalen. *Pett. Mitt.*, 96, 1952.

⑮ -heim, -hofen 地名は、-hausen, -dorf 地名があらわれ、中部ドイツのフラマン化がすすむことについては、A. Bach) やリール (K. Rübel) などによって、詳しく研究がすすんでい

る模様である (Oberbeck 註⑥論文二三七頁)。

⑯ 五五―一六年、ノルトチューリングガウ地方のザクセン人は、クロタール一世にたいして反乱をおこし、反乱失敗後、ランゴバルト王アルポインのイタリア遠征に加わったが、このときザクセン人が放置したウンシュトゥルト川北域には、クロタール王によってフリース人とセムノーン人の植民がおこなわれ、かれらはフリーセンフェルトとンフワーレンガウに定住した (早川、前掲論文六八頁)。

⑰ F. König; Erfurt (in Atlas des Saale-u. Mittleren Elbgebietes), S. 120. K. Junghanns; Die deutsche Stadt im Frühfeudalismus. Berlin 1950. S. 65. — in loco, qui dicitur Erphesfurt, qui fuit iam olim urbs paganorum rusticorum.

⑱ H. Müller; Zur spät- und neuchzeitlichen Vegetationsgeschichte des mitteldeutschen Trockengebietes. *Nova Acta Leopoldina*, 16, 1953. S. 57.

⑲ たとえば、ホーデ・ザール川には含まれたンフワーレンガウ北半は、一〇〇〇年頃、ハレンシュテットを拠点としたハルツグラーフシャフト (Harzgrafschaft) ・フシエルスレーン中心のホーデグラーフシャフト (Bodegrafschaft) ・ブマンカウ中心のフレンツカウアグラーフシャフト (Plötzkauser Grafschaft) ・フアルスレーン中心のフアルスレーンナグラーフシャフト (Alsleber Grafschaft) などに分れていた (J. Wütschke; Territorialentwicklung von Anhalt. in Atlas des Saale-u. Mittleren Elbgebietes, S. 52)。

しかし、各グラーフシャフトには、地理学的な背景があり、ハルツグラーフシャフトはゼルケ (Selke) 川沿いに森林開拓地名の多いハルツ山地を管区とし、ホーデグラーフシャフトはホーデ川右岸を、フレンツカウアグラーフシャフトはウィッヘル川下流域を、フアルスレーナグラーフシャフトは、dorf 地名のやや多いウィッヘル川上流域

を管区とした。

### 三

後期ガウの変貌をさらに明らかにするために、先にのべたフランク化 (Frankonisierung) の諸現象とならんで、キリスト教化 (Christiansierung) の地域組織として、八世紀以降成立してきた教区との関係を追求しなければならぬ。大小の教区の網を介して、異教的チューリンゲンは、キリスト教的世界に昇華していく。<sup>①</sup>

中部ドイツでは、七二五年、ボニファティウスによって本格的なキリスト教布教がはじまった。<sup>②</sup>その後教区の形成がはじまり、大教区(ディエツェーゼ Diözese)が、エルツビショップやビショップの管区として制度化された。一二世紀になると、ディエツェーゼは、アルヒディアコナテ(Archidiaconate)や、さらにその下位領域たるセデス(Se-des)に細分されるが、九・一〇世紀の教区は伝導の目的で設けられたもので、いまだはっきりした境界はなかった。その境界は、徐々に、しばしば紛争をくりかえしながら固定したにすぎない。

九世紀、中部ドイツの大部分は、マインツ大教区州にぞくした。その下に、ヴュルツブルク(Würzburg 七四二年)・ヒルデスハイム(Hildesheim 九世紀初頭)・ハルベルシュエタット(Halberstadt 九世紀初頭)・プラーグ(Prag 九七三年、但し一三四四年、エルツビストゥーム Erzbisum に昇格して分離)の各司教区ができた。チューリンゲンは、七四一年、ボニファティウスの創建になるエルフルト司教区が消滅して以後、ディエツェーゼ・マインツにぞくすることになった。九四八年、オットー一世の計画と関連して、スラヴ族教化の目的でつくられたハヴェルベルク(Havelberg)とブランドンブルク(Brandenburg)司教区も、マインツ大教会州に編入された。しかし九六八年、オットー一世は、マインツのエルツビショップとディエツェーゼ・ハルベルシュエタット(Halberstadt)のビショップ間の抗争をおさえるために、エルツビショップ・マグデブルクを創立し、東方政策の遂行をはかった。

以上のように、大小の教区が、九・一〇世紀以来、すでに整備されたものである以上、その管轄区域は、当時なお存したガウの境界や各種の政治領域を全く無視して画定

されたとは考えるわけにいかない。当時のガウは、歴史的に変動しつつ、なお一方では自然的単元に支えられていた。このようにガウが、自生的な古い地域秩序を背景に、ある種の政治的・文化的複合体たる性格をのこしていた点からみて、また多くのセデスの中心が後期メロヴィンガー時代の豪族所在地と推定される遺跡と結合し、かつガウに根をはった地方豪族自身、私教会 (Eigenkirche) やガウ教会 (Gaukirche) を樹立した事例があり、ボンニアティウスも七二五年、オールドゥルフに修道院建設後、Hugo・Albot など地方豪族層の支援をおおぎ、寄進をうけていることなどからしても、上からの教区組織の設定が、ガウの地域的にしくみや、ガウ相互の勢力関係などを考慮せずに機械的に断行されたはずはない。

もちろんこれらの教区内には、まだ森林や沼沢地が多く、したがってそれらの境界をシャープな線で復原することは事実と反するであろうが、その核心部のおよそのひろがりについて、別図のように復原された一二世紀、ないし一五世紀の教区をもとに、つぎのような解釈をこころみ、上述の推定を吟味することは、差支えあるまい。

(I) 一二世紀のディエツェーマインツは、イエハブルク (Teuchaburg)・ドルラ (Dorla)・セントマリリアエーヴイルギニス (St. Mariae Virginis)・セントセヴェリ (St. Severi) の各アルヒディアコナテに細分された。まずアルヒディアコナテイエハブルクについてみると、その境域の南部と東部はおそくまで湿地で、アンの繁ったウンシュトルト川の流路でかぎられ、また北部はヘルツ山地、西部はウンシュトルト・ヘルベ・ヘルメ諸河川の河源山地によって画された、山がちな教区であった。その範囲は、

一〇一一世紀のヘルメガウ・ナーベルガウ・アルトガウ・ファートルガウのほとんど全域をおおい、その上、ゲルマルマルクの東半分とエンギリンの西半分を包括するものであったことは、前図から明らかである。ゲルマルマルクがほぼ分水界のあたりで東西に二分割され、西半分がアルヒディアコナテハイリゲンシュタット (Heiligenstadt) に分属した理由としては、もと非居住地の多かったゲルマルク西方のアイヒスフェルトの森林開拓が、九世紀以降急速にすすみ、別図でもその一端がうかがえるように、ヴェッラ河谷やライネ河谷沿いに -thal・-burg・-fels・-stein 地

や・rode・reuth) 地名が群立した結果、ウンシュトゥルト河系よりは、むしろライネ河など西方の諸河系の地域にたいて、以前よりは強い政治的・社会的諸關係を結ぶことになり、ゲルマルマルクが、ウンシュトゥルト河系とアイヒスフェルトの兩地域に實質的にも兩断される情勢が熟していたからであらう。

さらにこまかくみると、アルヒディアコナテ内部の各セデスともに、ほとんど河谷をさしはさむ兩斜面に境域をひろげているばかりが多く、境界は山脈を走る。ウンターベルガ(Unterberg)・オーベルベルガ(Oberberg)・グロスヴェヒズンゲン(Groswechungen)の三セデスを合せた範圍は、ヘルメ川流域にひろがるヘルメガウの境域とはぼかさなり、オーベルベルガは、その支ガウ、ツォルゲガウと關係が深い。イエハブルクとバド＝フランケンハウゼン(Bad Frankenhausen)の兩セデスは、ほぼナーベルガウの境域を中核としており、マルクスストラ(Markusstra)・ゲルマー(Görmar)・キルヒハイリンゲン(Kirchhilingen)・グロイセン(Greussen)の四セデスは、アルトガウ・ファアートルガウ・アイヒスフェルトが混在したゲルマルマルクの東

名半分と、一部の例外をのぞいてはほぼ符合する。セデス＝ゲルマルルの同名のセデス中心は、地名からしてもその成立の古いことが推測されるが、この集落こそ、かつてのゲルマルマルクの中心集落でもあったのではあるまいか。もちろん一〇世紀前後には、森林開拓によって、ガウ周辺部に新しい居住領域がいろいろと拡大しており、なかでも「セデス＝ブライヘローデ(Bleicheroede)」のときは、その「roede」地名が示すように、セデス内の勢力の比重は、付近の旧ガウ共同体よりも、むしろ新しい開拓集団に移行していたとも考えられる。このような事例からみて、新しい教区組織は、ガウの旧体制と新しく胎動をはじめた開拓集落の新体制とを橋渡しする役割をもったばあいがあったとみてよいかもしれない。

アルヒディアコナテ＝ドルラは、ヴェッラ川とその支流ネッセ(Nesse)・ヘルゼル(Hörsel)の谷を中軸とした一まとまりの山間地方である。九世紀以降、ここにも多くの森林開拓集落や低湿地集落が成立した。ハイニヒ(Hainich)山地山麓のニーダードラ(Niederdrösa)・ウフホーヴェン(Uhoven)・グロッセン＝ペーリンゲン(Grossenböhlingen)・

グロッセンルプニッツ (Grossenlupnitz) の四セデスは、比較的はやく開かれたところで、ヴェストガウの境域をおおっており、ヴェッテラ川西方のセデス $\equiv$ レンダ (Renda) は、小さいリングガウと重なる。

アルヒディアコナテ $\equiv$ スント $\equiv$ マリアエ $\equiv$ ヴィルギニス は、ほぼウンシュトゥルト $\equiv$ ゲラ $\equiv$ ザレ川とチューリングン森でかこまれた領域で、ザレ川支流イルムの谷が、東北—西南方に縦走している。このまとまりのある領域も、機械的に画定されたものではありえない。北のフィンネ (Finne) 山地分水界以北のセデス $\equiv$ ラインスドルフ (Reinsdorf) は、ガウ エンゲリンの支ガウ Wigsezi の境域を内包しているし、その南方のグトマンズハウゼン (Guthmannshausen)・ウテンバッハ (Utenbach)・オスマンシュテット (Osmannstedt)・グロンプリンゲン (Grosspringen)・オレンドルフ (Ollendorf) の四セデスは、この地方でもっとも低湿地のすくなかったところで、ほぼオストガウの中核部をおおっている。オストガウの支ガウとみなされ、*ru*・*dach* 系地名の多かったヴィジヒガウは、セデス $\equiv$ ゾメルダ (Sommerda) を中核としている。この支ガウこそは、ワイマー

ル家ヴィルヘルム二世と四世 (一〇四二年) が一一世紀中葉までグラーフ職をもったところであることからして、少なくともここでは、旧来のガウ——グラーフ管轄領域——教区の間には緊密な関係があることを認めざるをえない。

ここで個々のセデスについて分析するだけの資料はもちあわさないが、たとえばアルヒディアコナテ $\equiv$ スント $\equiv$ マリアエ $\equiv$ ヴィルギニスのセデス $\equiv$ オーベルワイマール (Oberweimar) も、おそらくこの地方の豪族ワイマール家と関係する地名であろう。ワイマール家は、一〇世紀中葉から一一世紀中葉にかけて、この南のオルラミュンデ (Orlamünde) に本拠をもち、フステイガウをはじめ、チューリングン各地にグラーフ権をえて、辺境域に勢力をひろげた。  
(II) デイエツェ $\equiv$ マインツの北方には、ハルツ山脈を境としてダイエツェ $\equiv$ ハルベルシュタットが、ポーデ川支流にのぞむハルベルシュタットを中心ひろがっている。このダイエツェ $\equiv$ は、一五世紀には西はほぼオカ川を境にダイエツェ $\equiv$ ヒルデスハイムと接し、北はオーレ川を境にダイエツェ $\equiv$ ヴェルデンと、東はエルベ $\equiv$ ボーデ $\equiv$ オーレ川を境にダイエツェ $\equiv$ マグデブル

クと接している。東南部の七つのアルヒディアコナテたる  
 ハルツン (Harzann)・ウィーダーシテット (Wieders-  
 tedt)・クリンゲン (Hecklingen)・アシエルスレーベン  
 (Aschersleben)・ガテルスレーベン (Gatersleben)・アイル  
 ヴァルデスドルフ (Elwardesdorf)・ハドメルスレーベン  
 (Hadmersleben) は、シェワーンガウの境域とかさなり、  
 Leben 集団の核心地域にかかわしく、アルヒディアコナ  
 テの中心集落名も、Leben 地名が多い。この範囲は、一  
 〇六〇年、グラーフのアドバルトⅡフォンⅡバルレンシ  
 ャテット (Adalbert von Ballenstedt) のもとでつくられ  
 たグラーフシャフトⅡアシエルスレーベンの北半ともほぼ  
 重複する<sup>⑥</sup>。その南のアイスレーベン (Eisleben)・カルテン  
 ボルン・オステルバーン (Osterbahn) の三アルヒディアコ  
 ナテは、ホスガウの境域にかぶさる。カルテンボルンこそ  
 は、既述したように支ガウ、フリーセンフェルトの本貫で  
 あった。

さらに上ハルツ山地以北には、ボーデ・ブルッフ・オカ  
 川にはさまれて、ウツレーベン (Utzleben)・ヴェステルハ  
 ウゼン・(Westerhausen)・クヴェーリンブルク (Quedlin-

burg)・ハルベルシュタット・ホルドルフ (Hordorf)・アイ  
 レンシュテット (Eilenstedt)・ダルデスハイム (Dardes-  
 heim)・オステルウィーク (Ostervieck)・ヴェステローデ  
 (Westerode) の九アルヒディアコナテが、ハルツガウをお  
 おっている。その北部のオカ・シュンテル・アルラー川流  
 域にひろがるアルヒディアコナテたるマイネ (Meine)・オ  
 クセンドルフ (Ochsendorf)・ルクルム (Lucklum)・アツ  
 ム (Atzum)・キッセンブリュック (Kissenbrück)・シエン  
 シュテット (Schöppenstedt)・カルメ (Kalme)・ヴァル  
 テンシュテット (Walenstedt)・シヒニンゲン (Schönningen)  
 の九教区は、デルリンガウの境域と符合する。

東方のアルヒディアコナテ群たるエシエンローデ (Esch-  
 enrode)・レプケ (Räbke)・ゼルシエン (Selschen)・ゲーリ  
 ングスドルフ (Gehringendorf)・ゼーハウゼン (Seehausen)  
 ・オシエルスレーベン (Oschersleben)・アルヴェンスレー  
 ベン (Alvensleben) をつなぐ領域は、かのノルトチュエーリン  
 グガウの西半分にあたる。このガウは、九六八年、ディエツ  
 ェーゼⅡハルベルシュタットのぞくするマインツ大教区州  
 と、マグデブルクのぞくするマグデブルク大教区州に二分

されたのであるが、そこにはしかるべき歴史的背景があった。すなわち、すでに *stedt-leben* などの地名集団とガウ領域とのずれについて指摘したが、いまや、ドイツ東方進出にともなう新しい政治情勢と、対スラヴ政策の根拠地としてのマグデブルクの抬頭を考えるべきであろう。

つぎにアルヒディアコナテ内部の現存する集落地名についてみる。ハルツバンやウツレーベン・シエペンシュテット・マイネなどには、九世紀以降の開拓集落に比定される地名が卓越し、しかもこれらが各アルヒディアコナテを構成する主要な集落であることからして、教区の画定が、開拓集団の立地する領域をわくぐみとして行われた可能性をかぎとることができる。占居の早い場所においても、シエニンゲンやオシエルスレーベンなどのように、*leben* 地名の多いところ、ゲーリングスドルフやゼルシェン・ヴィーダーシュテットなどのように *-dorf* 地名の多いところ、アムムをはじめ西北部の教区のように *-mün-ten* 地名の多いところなどがあり、アルヒディアコナテことに、しばしば在地勢力やその集団の系譜関係にちがいがあったことも推定される。

ディエツェーゼ<sup>1)</sup> マグデブルクは、エルベ・ザーレ・ボデー・ムルデ・オーレ川を境界に利用しているが、その他すでに触れたように、マインツ大教会州との間には純粹に政治的理由によって画定された境界をもつ。また東部の二つのディエツェーゼたるメルセブルクやマイセンとの境界も、部分的には自然的な区画を無視しているが、その理由としては、当時、ドイツの東方進出に対応して、旧来の地域秩序を根本的に編成がえしなればならない政治情勢があった点があげられる。アルヒディアコナテ<sup>2)</sup> ヴァンツレーベン (*Wanzleben*)・ウィディングゲン (*Widdingen*)・カルム (*Calbe*)・シュタットマグデブルク (*Stadt Magdeburg*) は、ノルトチューリングガウの東半分に対応し、アルヒディアコナテ<sup>3)</sup> ケテン (*Köthen*) は、スラヴの *Serimunt* の占居するところであった。なおアルヒディアコナテ<sup>4)</sup> カルベは、一〇六〇年のグラフシャフト<sup>5)</sup> ミューリングゲン (*Mühlingen*) 管区とかさなるところが少なくない。しかし前者が、カルベを結節点として北方にひろがっているのに対して、後者は、ミューリングゲンを結節点として西南方にのびている<sup>6)</sup> のちがいがあ

なおディエツェーゼーヒルデスハイムについては、紙数の関係で説明をばぶく。

(Ⅲ) 以上の諸事例は、別表のようにまとめることができ

支 Gau	Wisichigau	1 sedes
	Wigsezi	1 〃
	Zorgegau	1 〃
	Friesenfeld	1 Arch.
	Scolelinggau	1 〃
	Salzau	1 〃
面積の小さい Gau	Ringgau	1 sedes
	Nabelgau	2 〃
	Helmegau	3 〃
	Engilin	3 〃
	Ostgau	4 〃
	Westgau	4 〃
	Hosgau	3 Arch.
面積の大きい Gau	Schwabengau	7 Arch.
	Harzgau	9 〃
	Derlinggau	9 〃

Gau と sedes の関係

る。支ガウは一セデス(またはアルヒディアコナテ)に、面積の小さいガウは一四のセデス(またはアルヒディアコナテ)に区画されており、一方、大きいガウのばあい、ほぼ七―九のアルヒディアコナテを含んでいる。このことは、ガウの分解について、つぎの推論をゆるすものではあるまいか。すなわち、教区画定に先だって、解体期のガウ共同体が、一―四、あるいは七―九のサブグループ——おそらく教集落からなる家父長制親族やゲフォルクシャフトを含む、自生的豪族支配の基盤——に分裂し、一方、支ガ

ウレベルのこれらの領域に即して、セデスやアルヒディアコナテが画定され、異教的なガウの分解が制度的におしすすめられたこと<sup>⑤</sup>。なお、これらの教区の中心集落が、すでに一〇世紀前後からグート所在地や商業中心地・寺院所在地として発展しはじめていた中世都市(オーベルベルガのノルトハウゼン・ゲルマールのミュールハウゼン・キルヒハイムのアルンシュタットなど)を避けて設けられたことも、教区が独自の方法で在地のしくみに密着しようとした意図を示す。

① 拙稿「大教区の形成とその地理学的意義について——ドインにおける三、四の事例を中心として」『人文研究』一〇(二)。

② B. Schweköper; Bistümer und Archidiakonate im 15. Jahrhundert (in Atlas des Saale-u. Mittleren Elbegebietes, S. 46).

③ K. Koerner; Die Kirchliche Verwaltungsgliederung Mitteldeutschlands im Mittelalter u. ihre Auswertung für die Geschichte der Kulturlandschaft. Petermanns Geogr. Mitt., 94, 1954.

一―二世紀のディエツェーゼーメインツについて、セデスの地域中心を地名で分類すると、a-stredt 地名(一六カ所)、-ingen、-leben 地名(二二カ所)、-dorf、-hausen、-heim 地名(九カ所)となり、いずれも起原の古さを示すが、その他シュルターの地名分類に入らない七カ所の地名がある。これらは種々の点から成立の古さが推定で



Erfurt	40 km <sup>2</sup>
Grossmonra	80
Grossobringen	90
Ossmannstedt	100
Ollendorf	100
Leubingen	105
Niederzimmern	125
Sömmerda	135
Kirchscheidungen	140
Jlversgehofen	165
Reinsdorf	170
Guthmannshausen	225
Kirchheim	225
Utenbach	280
Oberweimar	530
Pössneck	530
Alkersleben	590
Kirchremda	760
計	4390

アルヒディアコナテ=スント=マリ  
ア=エ=ヴィルギニスの各セデス面積

きる。なおペスネック (Pössneck) はスラヴ地名である。開拓時代の成立になると考えられるものは、ブライ(ヘ)ロダ (Bleichroda) 一つにかぎられるが、この付近でも四世紀以前の先史遺物は出土している。

④ 別図の教区のうち、ディエツェーゼルマイソンの各教区は、一二世紀の状態についてケルナーが復原したものである (K. Koerner 前掲論文)。しかしその他の教区については、前掲「歴史地図帳」所載の一五世紀の状態をあらわす (Bisümer u. Archidialkonate im 15. Jahrhundert, bearbeitet von G. Wentz)。

⑤ アルヒディアコナテ=スント=マリア=エ=ヴィルギニスの各セデスについては、ケルナーの前掲論文が参考になる。かれによると、四四〇 km<sup>2</sup> をしめるこのアルヒディアコナテのなかに、エルフルトをのぞいて一七のセデスがあるが、この面積は別表のように三ツラスにわけることができる。八〇—一七〇 km<sup>2</sup> の小面積のセデスは、先史時代の遺物の出土状況からみて、また前述の地名学的状況からみて、

⑥ ⑦ 前掲「歴史地図帳」五三頁。

⑧ ヘムベルクのウエストファリアにおける教区研究によると、各教区の中心地間の距離はほぼ一八 km 前後であった。一八 km の最短距離は、ところどころに山のある場所では約五時間行程で、一日で教会に往復できる範囲である (A. K. Hönberg; Studien zur Entstehung der mittelalterlichen Kirchenorganisation in Westfalen. Westfälische Forschungen, 6, 1943-52)。これと類似した現象は、チューリンゲンにおいても、いたるところにみられる。生活空間の発展を、体系的に把握しようとするはあい、こうした現象を手がかりとして論をすすめることができる。

居住のはやくすすんだところとみなされる。一方、大面積のセデスは、もとゲルマンの辺境にあたったザール・イルム川地方に近いウテンパッハ・オーベルワイマル・キルヒレムダ・ペスネックとチューリンゲン森やフランケン森に接したアルケルスレーベン・キルヒハイムなど、一一〇年までほとんど居住をみなかったところである。キルヒハイム・アルケルスレーベン・キルヒレムダの各セデスは、南部は新開拓地をふくんで、ゲラ・イルム・ザールの河谷を中軸に、南方に細長く体軀をのばしており、かつセデスの各中心地が、いずれも北方にまたがっていることからして、占居が北方からおこなわれたこと、またセデス分割当時なお南方の開拓が不十分だったことを物語っている。一方、以上のような諸事情からして、一二世紀のはじめ、セデス管区画定にさいしては、ほぼ人口を均等化しようとする意図があったと考えられる。

チューリンゲンでは、一〇世紀前後のガウ——セデス(アルヒディアコナテ)——グラーフシャフトの各領域間に、非連続の連続とでもいうべき現象があった。これらの領域は、その後徐々に成熟してきた聖俗の諸封建領域との間に、いかなる関連をもつものであろうか。封建諸力の政治的諸関係のなかで形成された封建領域は、きわめてこみいっており、一見そこには、以前の領域現象との関連がみとめられず、地域的秩序というべきものは存在しないかのようにみえる。はたしてそうであらうか。

一六世紀初頭のグラーフの勢力圏を含む封建諸領域については、前掲の地図帳にブトゥス(H. Buttus)が復原している<sup>①</sup>ので、これを手がかりとして、上記の関連をさぐってみよう。まず気がつくことは、一〇一一世紀のガウと一六世紀の封建領域との間には、さすがにきわだった重層関係のみられないことである。

ところが一二世紀の教区と一六世紀の封建領域との間には、つぎのような相互関係があった。

(I) デイエツェーゼ・マインツにおける封建領域についてみていこう。<sup>②</sup>アルヒディアコナテ・ドルラは、西部のセ

デス・レールダ・レンダなどと、北部のニーダードルラ・ウフホーヴェン、南部のヴァハ、ヴェッラ川以南のハウゼンなどをぞいで、大部分はエルネステイン選定侯家(Kurt-Ernestin)領であった。この所領は、ヴェッラ川支流ヘルゼル・ネッセ両河系を中軸とする山間部で、その一中心として、ゴータ(Gotha)とともに、両河の合流点にアイゼナツハ(Eisenach)が新興してきたが、このことは、この地方における新しい結節地域(nodal region)の形成を示すものであろう。しかしエルネステイン選定侯領は完全な一円所領ではない。ヘルゼル川流域には、ヘルシャフト・キルヒベルク(Herrschaft Kirchberg)、アプエルシュテット川流域には、グラーフシャフト・グライヘン(Grtschaft Gleichen)などが介入している。一方、上記のセデス・ニーダードルラは、フォークタイ・ドルラ(Vogtei Doria)やアルベルテイン(Albertin)家・マインツ大司教などの所領に分断されたし、セデス・ヴァハの同名の中心ヴァハなどのあるヴェッラ河畔は、西方のラントグラーフシャフト・ヘッセン

(Landgrafschaft Hessen) に所属することになった。またセデス・ヴァハやハウゼンの南部は、アプタイ・フルダ (Apter Fulda) に編入された。これらの事態は、ヴェッラ川沿いにのびてきたヘッセンやフルダなど西方封建諸勢力の拡大を示すものである。

アルヒディアコナテ・マリアエ・ヴィルギニスでは、セデス・グトマンズハウゼン・グロソプリンゲン・オスマンシュテット・オーベルワイマール東部を結ぶ一円の場合が、エルネスティン家領にぞくし、イルム川左岸のワイマールが、対岸の旧セデス中心オーベルワイマールをはるかにし、この地方の結節点として抬頭してきた。他方、南部のセデス群たるキルヒハイム・アルケルスレーベン・キルヒレムダなどの中世開拓地は、やや占居のはやかだった上記の北部諸セデスから離れて、主としてグラーフシャフト・シュヴァルツブルク・ブランケンブルク (Schwarzburg-Blankenburg) にぞくしたのが注目をひく。

このアルヒディアコナテの中心はエルフルトであったが、一六世紀のエルフルトは、すでに周囲にほぼ一円の支配領域を確立していた。そして、その一円所領の外側には、エ

ルフルト領の飛地ゼメルダ (セデス・ゼメルダの北半) をはじめ、グラーフシャフト・グライヘンの飛地 (オールドゥルフ・レムダ・ブランケンハイム・ベルカ周辺など) が散在することになった。

北のアルヒディアコナテ・イエハブルクでは、セデス・オーベルベルガ・グロスヴェヒスンゲン・ブライヘローデの東半分など、中世の開拓集落の多いところが、グラーフシャフト・ホーンシュタイン (Hohnstein) にくりこまれた。セデス・ウンターベルガの大部分は、グラーフシャフト・シュトルベルク (Stolberg) にぞくしたが、南部のヘルメ川流域ではグラーフシャフト・シュヴァルツブルク (Schwarzburg) 領と交錯している。この所領の交錯は、ヘルメ河谷を掌握することの重要性を示すものであろう。ここでは、すでに一二九九年にヴァルケンリート (Walkenriet) 僧院が設立し、ケルブラ (Kelbra) から上流の干拓がすすみ、四年にはジイティヘンバッハ (Stichenbach) 分院の援助で下流の開発もおこなわれ、「黄金の洲」 (Goldene Aue) とよばれるゆたかな耕地ができた。ヘルメ支流にのぞむノルトハウゼン (Nordhausen) 周辺部が、帝国都市と

して独立したのも、このことを証明するものである。その南方では、ヴィッペル・ヘルベ河谷をしめたセデスⅡバドⅡフランケンハウゼン・イエハブルク・マルクズストラの大半・グロイセンの北西部が、グラーフシャフトⅡシュヴァールツブルク領となり、異例のことではあるが、各セデスの中心フランケンハウゼン・グロイセンなどが、一六世紀にも政治中心として存続した。

一方、セデスⅡゲルマールは、東部をエルネステイン家の飛地とした以外は、セデス中心ゲルマールの西方に接したウンシュトゥルト河畔の帝国都市ミュールハウゼン(Mülhausen)領となり、ガウ中心——セデス中心として古代以来連続してきたゲルマールの中心機能には、もはや昔日の面影はない。その他、ウンシュトゥルト河にのぞむ場所では、セデスⅡキルヒハイリゲン・北西部をのぞくグロイセンなどが、アルヒデアコナテⅡドルラのセデスⅡウフホーヴェンやニーダードルラ南部、セントⅡマリアエⅡヴィルギニスのセデスⅡロイビンゲンの大部分・グロスモンラの北部・ラインスドルフ東部などとともに、ほぼ一円のアルベルティン家領を構成したのが目立つ。これらの

領域現象は、なによりも、一〇世紀まで低湿で交通妨害的な意味しかもたなかったウンシュトゥルト川流域が開発され、この流路が流域一円を結ぶ媒介機能をいちじるしく高めてきた新しい地域の現実を、封建権力がたくみに掌握した事態を映しだすものであろう。<sup>④</sup>

以上のように、一六世紀初頭の封建諸領域は、なお部分的には一二世紀—一五世紀の教区組織と関連をもっている。しかし全体としては、教区との非連続がいちじるしい。九世紀以来の森林開拓の充実や、ウンシュトゥルト川その他の河岸低湿地の開拓、それにもなう交通系統の整備、新しい地域中心の析出<sup>⑤</sup>、さらにこれらの諸事情とからみついた聖俗両封建勢力の競合などによって、以前とは性格のちがった地域構造があらわれてきたのを疑うことはできない。既述したように、一〇—一二世紀のガウⅡ教区の区画と密接な関連を示した古い成立になる地名類型の分布現象も、当然のことながら、一六世紀の封建領域の配列とは、ほとんどつながりをもたない。また一二—一五世紀のセデスやアルヒデアコナテの中心集落にして、一六世紀初頭の都市として発展した集落は、きわめて少ない。

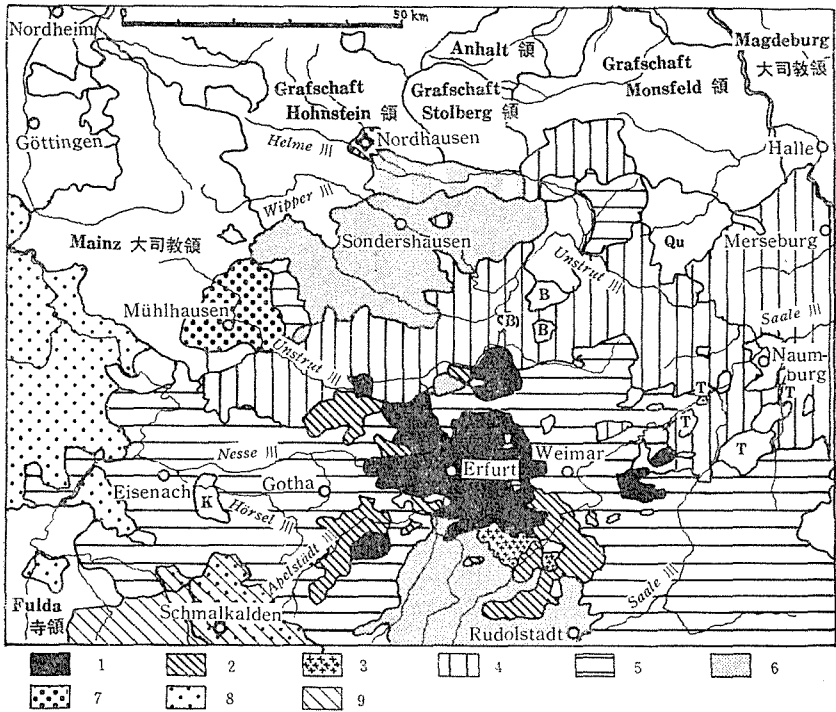
いまやチューリンゲンには、こみいった聖俗両界の中世的領有関係の網がはられてきた。はたしてそこには、「河谷の生活空間」としてのガウの旧秩序にとつてかわる、いかなる地域的秩序の存在することが指摘できるのであろうか。

(Ⅱ) も一度チューリンゲン全体をふりかえってみよう。

かつてヘルメガウやディエツエーゼーマインツの北辺をかぎったハルツ山地は、一六世紀においても、なおグラーフシャフト<sup>ト</sup>ホーヘンシュタインやシュトルベルクの北辺をほぼ画しているし、西部や南部でも、アイヒスフェルト・ハイニヒ・チューリンゲン森などが、境界としての機能をもちつづけてきた。これらの範圍こそは、所謂チューリンゲン盆地であつて、古代王国以来のチューリンゲンのオートノミーは、その盆地を中心として、なお形をかえて生きつづけていたといえよう。ただ森林開拓が進むにつれて、山林の境界としての機能が絶対的なものではなくなり、境界が帯状から線状へと尖鋭化してきたのは否定できない。ハルツ山地は、いまも北部の *ik·maken·sik·glik* (s) などと、南部の *ich·machen·sich·gleich* (glichen) をわかつ方

言線である。

チューリンゲンの内部についてみると、南部では、エルフルト直轄領を中核にして、グラーフシャフト<sup>ト</sup>グライヘン (Gleichen) の分散した所領・エルフルト領飛地など種々の小所領が、あたかもエルフルトの衛星のように付着しており、その外側には、一四八五年の分割まで一円のヴェッティン (Wettin) 家領を構成していたアルベルティン家とエルネスティン家の広大な両所領が、一方はウンシュトゥルト川にそつて東西に長く、他方は西のアイゼナッハやゴータと東のワイマールを中心として、ともにエルフルト領をとりまいてゐる。またその南北には、グラーフシャフト<sup>ト</sup>シュヴァルツブルクが、北ではゾンデルスハウゼン (Sondershausen)、南ではルドルシュタット (Rudolstadt) を中心としてひろがっている。ここにはエルフルトを中心として、三重の結節地域の構造があるともてよからう。その北方では、ヘルメ河畔のノルトハウゼン帝国都市領を實質的な中心として、三つのグラーフ領たるホーンシュタイン・シュトルベルク・シュヴァルツブルクの所領があい接している。また西方では、ウンシュトゥルト川上流のミュー



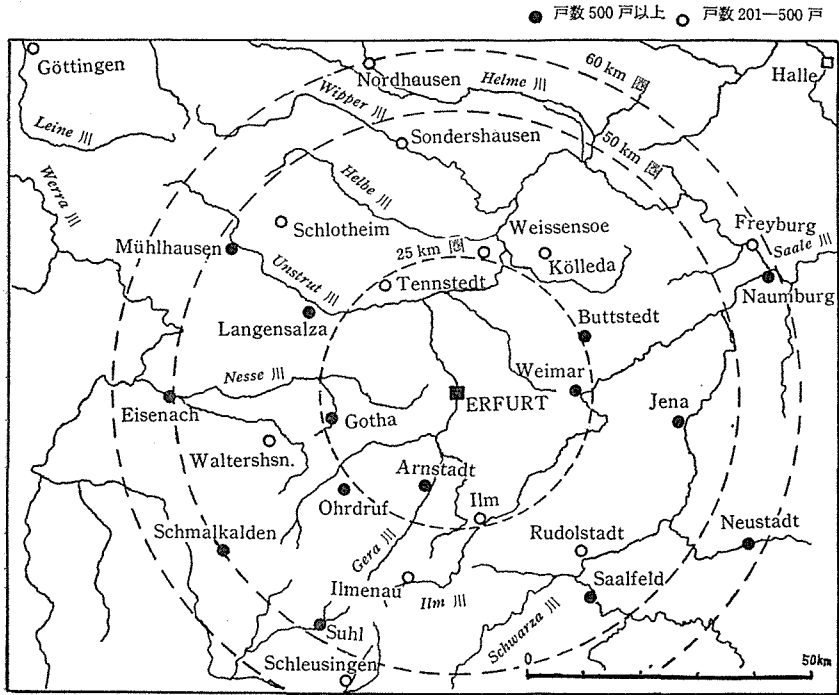
- 1 Erfurt 2 Grafschaft Gleichen 3 Vögte Plauen-Greiz 4 Albertinn 家領  
 5 Ernestinn 家領 6 Grafschaft Schwarzburg-Blankenburg (1552年 Sondershausen  
 中心と Rudolstadt 中心に分割) 7 帝国都市領 8 Landgraftschafft Hessen 9 Grafschaft  
 Hennenberg-Schleusingen K Herrschaft Kirchberg B Herrschaft Beichlingen  
 T Herrschaft Tautenburg Qu Herrschaft Querfurt

### 16世紀におけるチューリンゲンの封建諸領域

ルハウゼン帝国都市領を中心として、北西部のメインツ大司教領と南部のエルネスティン家・アルベルティン家両所領とがならんでいる。

中世チューリンゲンにおける地域的秩序を求める鍵は、上記のような諸領域の配列の仕方にあると考えてよい。こうした封建的結節地域のしくみは、つぎのように、当時の宗教・軍事・政治・経済上の中心機能の立地点について、その配列を考えるばあい、さらにはつきりする。

この地方について、ケルナーが算出した一六世紀初頭の各集落の戸数をもとにして、二〇一戸以上の全集落の立地を図化すると、エルフルトを中心として、別図のよ



16世紀の主要都市の配列

うな配列をなす。すなわち、五〇〇戸以上の都市はエルフルトから約25 km および約 50 km の円周上にほぼ近い地点にあり、二〇一戸—五〇〇戸のばあいも、25 km の円周上からさほど遠くない地点にあることが多い。60 km の円周上には、ノルトハウゼン・フライブルク (Freyburg) ・ナウムブルク (Naumburg) ・ノイシュタット (Neustadt) などが立地する。

つぎに各都市間の距離についてみると、もちろん地形や人口分布・領域関係などによって一様ではないが、それでも18—19 km 前後の間隔をとるばあいが少なくない。この間隔は、ほぼまわりの地域から一日行程で往復できる距離であり、徒歩能力にもとづいて、各都市の関係圏にある程度の画一性があったことを示している。エルフルト領自身も、一円所領の部分は、エルフルトを中心とする直径18-19 km の圏内にある。この点からすると、エルフルト周辺の都市は、エルフルトから18 km の円周上に立地すべきであるが、エルフル

ト領内では都市建設が政治的に禁止された事情を考慮しなければならぬ。ただ所領のひろがり短かい方向でのみ、エルフルトからはばば 18-20 km の距離でアルンシュタット (Arnstadt)・タンローダ (Tannroda)・ヘルカなどが成立した。エルフルト領をとりまく各飛地は、エルフルトからほぼ 25 km の円周の内外にひろがっており、しかもこの円周上に、各中心都市ゴータ・オールドドルフ・イルム・ワイマール・ブットシュテット (Buttstedt)・ケレダ (Kieda)・ランゲンザルツァ (Langensalza) などがならんでいる。<sup>⑦</sup>

チューリンゲンの封建諸領域は、このようにして、ガウ一教区とつづいた古代以来の地域構造を止揚して、一種豪壮な、予想外に秩序正しい結節地域の構造をうちだした。こうした地域の発展が、地域論一般の上で、いかなる意義をもつかについては、他日に説明をゆずらなければならぬが、ただ現在のチューリンゲンにおける各階層の中心集落の配列や行政区画が、はやくもこの時代におおよその素描をえがきおえたことだけは、ぜひ指摘しておかなければならぬ。<sup>⑧</sup>

① 一三五〇年の封建諸領域については、前掲「地図帳」にケルナーの復原した地図が収録されているが、領域配置の大勢は「一六世紀のもの」と大差はない (F. Koerner; Territorialentwicklung Thüringens, in Atlas des Saale u. Mittleren Elbegebietes, S. 51)。  
 ② 一三世紀の教区の細部は、なしたの「マインヘーゼ」マインヘーゼのしか明らかでないが、本章では、このマインヘーゼにおける一六世紀の領有關係に焦点をすぼめる。

③ O. August; Niederländische Einflüsse in Siedlungen und Flurnamen (in Atlas des Saale-u. Mittleren Elbegebietes S. 94.)

④ O. Schüster; Die Siedlungen im nordöstlichen Thüringen, S. 45.

⑤ 一三世紀には、セデス中心地の大部分は農村にすぎなかった。マインヘーゼ・マインツにおける四つのマルク・マインローナのうち、セデスの中心集落のうちで中世都市であったのは、西部ではドルラのヴァンビクトインブルク、東部ではセント・マリヤ・ヘーデルギニスのメスネック、北部ではマインフルタのムドローランケン・ハウゼント・ライヘローデの五集落にすぎなかった。その他、中世後期に至って村から付近の町に移ったものが三件ある。ドルラにおけるハウゼンからザルンゲンへの、セント・セルヴェリにおけるウフホーヴェンからランゲンザルツァへの、ヴァールウインケルからゴータへの移行。(F. Koerner 前掲, Pet. Mitt. 94 所収論文)。

⑥ F. Koerner; Die Bevölkerungsverteilung in Thüringen am Ausgang des 16. Jahrhunderts, Wissenschaftliche Veröffentlichungen des Deutschen Instituts für Länderkunde, 15/16 1958.

⑦ 「われらの各都市の勢力の交替については」 F. Koerner; Die



Lage u. die Besitzstetigkeit der Machkerne in Thüringen im Verlaufe des XV. Jahrhunderts. Wissenschaftliche Veröffentlichungen des Deutschen Instituts für Länderkunde, 17/18 1960.

⑧ K. Boesler: Die Städtischen Funktionen. Abhandlungen des Geographischen Instituts der Freien Universität Berlin, 6, 1960.

## 五

一〇世紀以前から、異教的チューリンゲンにおいて、ガウが細分化・縮少化の傾向にあり、一方キリスト教化の細胞となったセデスやアルヒディアコナテの画定が、かかる傾向を助長し、そこを足がかりとして、中世の封建諸領域が、ガウの並存した古代にはみられない独自の結節地域の構造をうちだしたことについては、すでに論述した。ところでガウや諸教区をはじめ、その後に多彩な形成をみた封建諸領域の内側には、すでに地名の分布でとりあげたように、さまざまな集落があった。上述の領域現象は、諸領域の構成要素としての集落の発展にとって、いかなる意義をもったのであろうか。

「ここでまず予見できることは、各集落が、「基礎地域」

としてのガウや支ガウに依存した古代の段階から、ガウの拘束をうちやぶって、みずからオートノミーをもった「基礎地域」へと発展する可能性が強まったことであろう。こうした予見を実証することはできるであろうか。

(I) ドイツにおける集落地理学ないし集落学の最近の研究成果によると、ライン流域から西南ドイツにかけて、およそ七—八世紀以来、集落は散村や小村から集村へと形態を変化したばあいが多いとされる。こうした集村化 (Ballung) の現象にに応じて、共同体的規制をともなった中世的な三圃農法を経営する体制がととのってきたとみる学説も有力である。また、こうした体制をもとに、中世の領主支配の確立されるプロセスを理解しようとする歴史学の立場も生じてきた。

いま、前掲「歴史地図帳」に収録されたチューリンゲンの集落地名のうち、フランク系地名と開拓地名などをのぞき、古代王国時代から、おそくとも一〇世紀末までの成立に  
なる蓋然性の強い *Tebou-ingen* と、*ra* 系集落だけをと  
りだし、おおまかに集落の境域面積を算出してみる。まず  
比較的これらの集落がかたまって立地する部分に 100 km<sup>2</sup>

地名	戸数						
	1-5戸	6-10戸	11-30戸	31-50戸	51-70戸	71-100戸	100戸以上
-a		9	45	28	14	7	22
-stedt		4	26	30	16	11	7
-leben			6	15	12	10	15
-ingen		5	7	9	6	3	6
-hausen	1	1	8	16	10	11	8
-heim			4	4	3	2	3
以上の合計	1	19	96	102	61	44	71
-dorf	1	12	85	27	14	3	5
-au, -berg, -born, -furt, -brück など		11	35	8	2	9	11
-bach (-beck, -beek, -ke)	3	6	40	20	10	5	7
-rode, -reute	1	2	32	11	2	2	5
-thal, -burg, -fels	2	1	12	6	2	2	6
その他	15	44	210	72	28	31	39

16世初頭のチューーリンゲンにおける集落戸数  
(F. Koerner; 1958 年の前掲論文付表により計算)

単位の方眼の網目をかけ、網目ごとに集落数を計算すると、集落の境域面積の平均値は、シュワーベンガウ 30 km<sup>2</sup> ノルトチューーリングガウ・ナーベルガウ・ヘルメガウなどで 25-20 km<sup>2</sup>、ゲルマルルクで 17 km<sup>2</sup> となる。しかし密集部分では、10 km<sup>2</sup> 前後のばあいも少なくない。しかし、これらの集落のすべてが確実に一〇世紀以前に成立したとは断定できないし、古い集落にして荒廃したり、フランク系その他に地名を変化したものもあるであろうが、シュリューターの「北東チューーリンゲンにおける集落」(前掲) 所収の第五図「集落史」をもとに、ヘルメ・ウンシュトゥルト川流域で、前と同じ限定のもとに、文献上少なくとも八世紀に存したことの明らかな集落について、全体の境域を復原して計算しても、ほぼ同じ結果である。

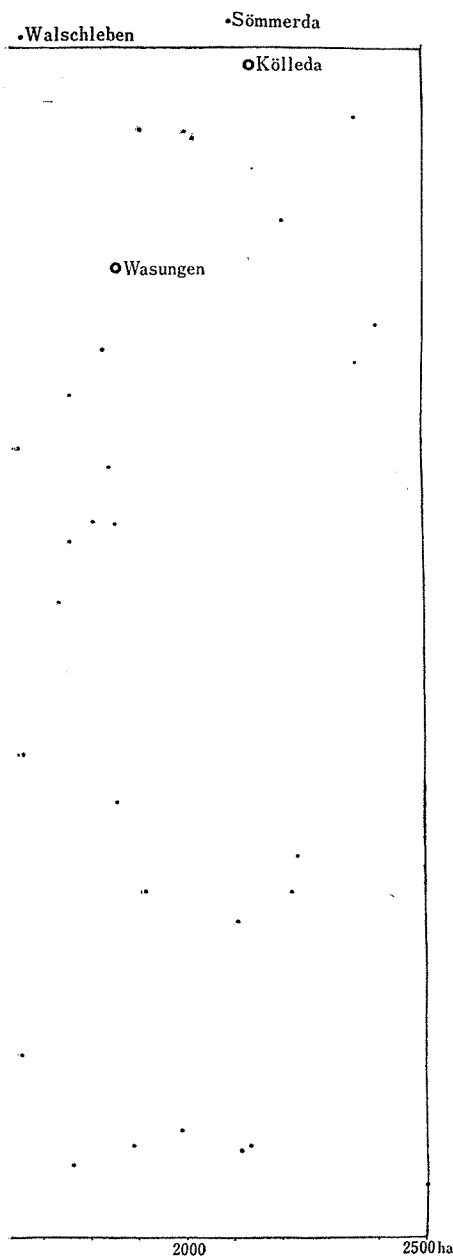
そこで、上記の数値が、古代チューーリンゲンにおける集落の境域面積の大勢を示すと考え、古代ゲルマニアの推定人口密度を三一五人 (1 km<sup>2</sup>) に

つき)として一集落人口を計算すると、極限值は一五〇—三〇人程度となる。だが現実には、境域面積が狭いところほど人口密度は高かった可能性があるから、九〇—一五〇人が平均値となるであろう。いまかりに、一戸七人前後とすると、戸数では極限值で約四—二〇戸、平均値で約七—一三戸となる。四戸前後の集落は、一応散村—小村とみなしてよいが、二〇戸となると、散村や小村とともに、小規模な集村であった可能性もでてくる。おそらく集村は、ガウや支ガウの中心集落や市場交通集落などでは、はやくから存したであろう。集落ごとの自律性は、古代にはがいして弱体であったと考えざるをえない。<sup>②</sup>それだけに、古代における社会生活の最小の完結性が演じられた場として、ガウや支ガウの果した機能を強調せざるをえないことになる。

そこでいま一度、別の資料をつかって、集落形態をめぐる問題にアプローチしてみたい。時代はやや下るが、一六世紀の集落については、上にのべたように当時の諸文献から戸数・人口・経営耕地面積などをとりだしたケルナー(Koerner)作製のリストがある。このリストを地名別に整理して、集落の戸数規模について右表の数値がえられた。全

体の戸数規模をみると、六一—三〇戸が圧倒的に多く、前記の推定とほぼ同じ傾向を示す。しかしこれらの戸数規模をもつ集落の大部分は、*-dort*・*-an*・*-born*・*-bach*・*-rode*・*-thal*など、地名上では八〇〇年以後の開拓集落とみられるものである。このことは、八〇〇年以後でできた集落が、一六世紀においても、林隙村や集村以外に、かなりの割合で散村や小村形態をとっていたことを暗示する。ところが、すでにそれ以前からチューリングゲンにあったと推定される *-stedt*・*-leben*・*-ingen* 地名と、フランク系の *-hausen*・*-heim* 地名は、いずれも三一—五〇戸がもっとも多い。したがってこれらの集落では、三〇戸にみたない散村や小村とともに、三〇戸以上の集村があったことも十分に予想できる。これらの事実からして、中世の開拓集落をのぞくと、一六世紀のチューリングゲンには、古い成立になる集落を中心にして、すでに現存集落につながる、かなり多くの集村があったことになる。<sup>③</sup>

ところが、先にみたように古代にはいまだ散村や小村が多かった。とすると、一六世紀における集村形態の分布は、注目すべき現象でなければならぬ。これらの集村形態が

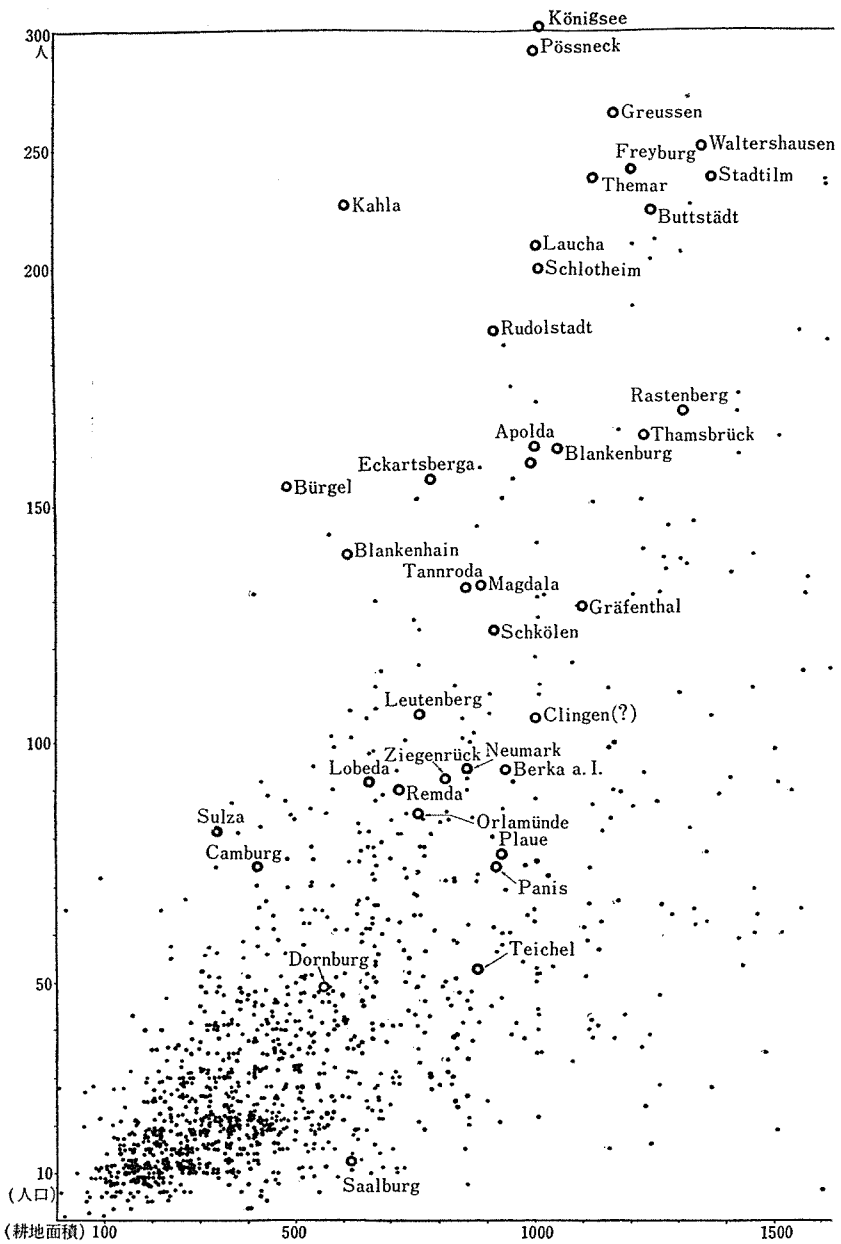


(円は都市権をもつ集落)

いつごろから形成されたか、それを直接示す資料はないが、少なくとも九世紀ごろから、大がかりな森林開発にともなうって新しい集落が群立したのが事実であるかぎり、それに先行する母村の充実とその人口過剰があったはずであろう。<sup>④</sup>

おそらく、こうした母村の充実こそ、集落形態上では集村の完成に通じ、生産様式上では、粗放な殺草農業より一歩進んだ三圃ないし二圃農業の普及や、フーフェ制 (Huf-ordnung) の確立と、因果関係にあったと考えられる。花<sup>⑤</sup>

粉分析のミューラーは、古代チューリングン王国崩壊ごろから、森林や牧草の数値が急減し、一方、殺物の数値が上昇しはじめることに着目し、これこそ殺草農業から三圃農業への転換を示すものであろうとしている。<sup>⑥</sup> このようにみてくると、集村化現象は、自然的条件のゆるすかぎり、ヴェーゲ (Weg) やガッセン (Gassen) のまわりへ屋敷を凝集する形をとって、かなり以前から、——おそらく古代王国の崩壊を一つの契機として——徐々に一般化してきたと



16世紀チューリンゲンにおける集落の戸数と耕地の関係

考えるのが妥当であろう。古いガウや支ガウの中心集落は

た。

いうまでもないが、中世に教区中心となった農業集落なども、既述したように、豪族の本拠であったことが多かった。

以上を総括すると、一〇一一世紀のチューリンゲンの地理像は、つぎのようにえがかれる。くずれてきた異教的

これらの集落では、教会の設置以前から集村化を開始し、自生的なまわりの支配下の小・散村群——後にセデスやアルヒディアコナテとして制度化される領域——にたいして、あらゆる面で牽引力をおよぼしていたばあいも、少なくなかったであろう。やがて、フランク系の大型広場村や街村が、また森林では林隙村が、本格的に創設されることになった。

ガウの遺制。それに即応したキリスト教化の細胞たる大小の教区。これらの地域的わくぐみのなかで、みずからの自律性を強め、しだいに集村化の方向をうちだした占居の古い場所。まわりの開拓地に群立した中世の散村・小村・林隙村。

(Ⅱ) このような種々の「基礎地域」を、外側から封建体制のもとに内包し、封建的支配の末端細胞として再編成していった主体こそ、かの封建的諸勢力であった。上述した

とここで集村化は、集落ごとの共同組織を強化するが、これこそ、先に私が想定した集落ごとのオートノミーの強化そのものであろう。このようにして、地域社会が生活のよりどころとした基本の場所は、ガウや支ガウレベルから集落レベルへと、これまた徐々に移行してきたのであった。まさに、ガウから村への「基礎地域」の緊縮であり、ガウの分解であろう。なお本稿ではふれることができなかったのが、このような「基礎地域」の上におおいかぶさってきたのが、教区の最末端管区としての村教区 (Parre) であっ

一六世紀の封建諸領域のなかにあって、各種の地域中心をも含めて、全集落はいかなる地理学的秩序をおびたのだろうか。

前図のように、一六世紀初頭の各集落の耕地面積と戸数との間には相関関係がみられる。前図は、当時の諸史料からケルナーが整理した前述のリストによって作製したものであるが、全体としては、集落の耕地 600-100 ha、戸数 30-110 戸のばあいが圧倒的に多い。戸数六〇戸前後、

耕地 900 ha 前後を境にして、それ以上の戸数や耕地規模

をもつ集落数が急激するが、このことから当時のノーマルな農業集落の規模に一つの限界があったと考えられないだろうか。七〇戸前後から、都市権を認められた集落の出現が目立つが、これらの集落は、いずれも耕地規模に比して戸数の多いのが特色であり、かなりの非農業人口をかかえていたことが推定される。九世紀の開拓時代がはじまる以前にさかのぼる古い集落では、当時戸数三一一五五戸のばあいが多いことは既述したが、さらに別図の集落分布をも考慮に入れるとき、当時の集落現象のなかに、三一一五五戸程度の規模をもつ集村の形成をめざす底流があったことが認められる。すくなくとも産業革命以前においては、この程度の規模をもつ集落が、普通の農村共同体として存続するのに最も適当な「基礎地域」でありえたことは、他地域についても証明できる。一方、封建諸権力の側からみれば、この程度の末端組織が、最も掌握しやすい規模であったのであろう。

歴史の舞台としての大小の「地域」の発展には、独自の構造と秩序があった。歴史はそれに、微妙に規定されてい

る。

- ① デルブリックは、紀元初期のゲルマニアの人口密度を四一五人と推定している (Delbrück; Geschichte der Kriegskunst. Vol. 2, S. 14-15)。一方フロムホによる<sup>1)</sup>当時のドナウ流域四・七人、ガリア七・六人と推定されているので、中部ドイツはほぼデルブリックの推定に落着く (J. Baloch; Die Bevölkerung d. griechisch-römischen Welt, Leipzig 1886)。ノードは、中世初期のオスマンリットに比べて、人口密度三人と計算している (G. Wrede; Die Langstreifenfur im Osnabrücker Land, Osnabr. Mitteilungen, 66, 1954)。本稿では、以上を勘案して、三一五人として計算する。その他、ミッラーローヴァン (Miller-Wille) やクナツケ (Kötzschke) の推定人口密度があるが、これらに比べて、W. Abel Geschichte der deutschen Landwirtschaft, Stuttgart 1962, S. 13. 参照のこと。

- ② 古代集落が散村や小村をなし、集落ことの自律性がよわかったということは、集落内の農民相互の共同がルーズであったことを意味しない。もともと leben が財産を示し、ingen が特定の人名を冠し、その人名の首長のひきいる集団を意味したことを吟味すべきであろう。かつ、前記歴史地図帳 (二五図) にアウグストが復原したポレーベン (Polleben) 集落の六世紀以前の耕地も、ほぼ数 km<sup>2</sup> の面積で、一か所にまとまっており、その外側に広大な未開墾地 (六世紀以後耕地になる場所や放牧場など) や森林がひろがっていることからして、集落こととの地縁的な共同は、当然あったと考えられる。

- ③ アウグスによると、一九世紀初期、この地方には、散村・グート村・小村のほか、集村形態として、つぎの六つの類型があった。(不規則な小さい塊村・稠密な塊村ないし塊村状路村 (Haufenwedort)。

粗塊村ないし粗塊村状路村・規則的な小さい集村（広場（Platz）村・ガッセン（Gassen）をつけた村）街村ないし大型広場（Anger）村・列村）——O. August: Formen ländlicher Siedlungen vor den Veränderungen im 19. Jahrhundert. (in Atlas des Saale-u. Mittleren Flussegebietes. 2, S. 59-105)

④ オストファールンについては、エヴァースが、紀元初期におけるチューリングゲン王国による占領によって、防禦のための集村（具体的にハザック・ガッセン（Sackgassen）をつけた村）が成立したことを推定している（W. Evers 前掲 Pet. Mitt. 96 所収論文二五八頁）。集村が普及する絶対年代については、なほ吟味すべきことが多いが、集村が、規則的であれ、不規則的であれ、wege や Gasse のまわりへの家屋の集合という形で形成されたばあいの多いことは、アウグストも豊富な事例をあげている（註②）。これらの空間は、家畜を共同

で保護する役目を果たしただけでなく、そこに集会所や村教会が設けられ、集落単位の共同体機能をますます強めることになった。大型広場村（Angerdorf）は、こうした機能をまっとうするよく果した。

⑤ フーフエの概念は、古代チューリングゲンに存在した。しかし、Leistungshufe の形成とフーフエの導入は、フランク時代、グレントヘルシャフトの影響下に生じた（August 前掲論文九二—一三頁）。なま、ゲヴァン制（Gewannenteilung）と、広場やガッセンをつけた規則正しい集村の成立が、フランク族による入植と関連することは、すでにシュリエーターの一九〇三年の著書（三一—三頁）において指摘されている。

⑥ H. Müller 前掲論文、五八頁。

（京都大学助教授）



## Decline of the Japanese Enlightenment

—in the case of *Yukichi Fukuzawa* 福沢諭吉—

by

Masaki Hirota

One of the still unsolved points in the innumerable articles on *Fukuzawa* 福沢 is how to grasp his change from the beginning to the latter term. This article explores the cause of his change from the 7th year around to the 14th or 15th year of *Meiji* 明治 as a link of decline of the Japanese enlightenment, focusing attention upon his correspondence to the political issue and the relation of his correspondence to his view of the people. His view of the masses, in accordance with the development of class struggle, suffered a transformation since the enlightening period, and brought a diversion from the enlightening to the social organic view of the world; then, limited to our chief study on a locus of his transformation and the structure of his thought, this article leaves out the current of other thought in close connection with it.

## Thuringen Communities in Relation with Gau Parish and Feudal Territory

by

Ichiro Suizu

In Thuringen, the old place-names, such as “-affa, -leh, -ithi (-stedt), -leben, and -ingen”, are distributed in groups with every similar kind; and their range, as a “living-space in the valley”, mainly coincides with that of ancient Gau a geographical unit.

Judging from the fact that the place-names, “-heim, -hausen, and -dorf” in close relation with the West like Frank, and lower damp lands and clearings of forest, which were established after 6th to 9th centuries, were distributed in way of disturbing the settlement of Gau, we can presume the dissolution of Gau communities since the ruin of the ancient kingdom in 531. The parishes, growing to shape

themselves since the 8 th century, set a net of Christianization on the base of influential sphere of local lords or Graf and Gau in the dissolving period.

On the other hand, the feudal territories at the beginning of the 16 th century developed the new nodal region with that regional richness for a background, unknown in ancient times, such an cultivation and adjustment of rivers, centering around mediaeval cities like Erfurt. This is not always unrelated in parish system from the 12 th to the 15 th century.

In such a change of regional structure in ancient and mediaeval times, autonomy of each unit of region, linked firmly to expansion of arable land, spread of three-field cultivation, and gathering into the village.